

秋田県文化財調査報告書第96集

蒲沼遺跡発掘調査報告書

1982・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

## 序

蒲沼遺跡は八郎潟地区の県営ほ場整備事業に係わる遺跡で、県農政部より昭和56年度に実施する計画が提出されました。その中で現水路を深くして拡幅または新設する計画があり、地下の埋蔵物に影響を及ぼすと考えられました。そこで県教育委員会では、水路部分の発掘調査を行って記録保存を図ったものであります。

調査の結果、遺構は検出されず平安時代の土器、中世後半から近世にかけての陶磁器、他に木製品等が出土しました。本報告書はそれらをまとめたものであります。本報告書の刊行が関係各位に活用され、文化財保護に資する所があれば幸甚に存じます。

最後に、秋田農林事務所土地改良課、八郎潟町教育委員会、土地所有者をはじめ、調査の実施に御協力下さった方々に対し深く感謝の意を表します。

昭和57年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

## 例 言

- 1 この報告書は、秋田県南秋田郡八郎潟町蒲沼 150 - 1 他に所在する蒲沼遺跡の範囲確認調査と発掘調査結果をまとめたものである。
- 2 出土遺物の鑑定は、陶磁器は秋田県立博物館館長 奈良修介、同館学芸主事 磯村朝次郎、同 藤原茂、武田事務所 武田孝義(能代市)、木製品は秋田県立博物館館長 奈良修介、秋田城跡発掘調査事務所職員、石質は秋田県立博物館学芸主事 嵯峨二郎の各氏にご指導、ご助言を得た。記して感謝の意を表する。
- 3 土色の記載については、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』を使用した。
- 4 報告書の執筆は第 2 章、第 4 章第 1 節の 1 と 2 の土器については佐藤雅子が、他は柴田陽一郎が担当した。
- 5 発掘調査中及び報告書の出土遺物の写真撮影は柴田陽一郎が担当した。
- 6 出土遺物の挿図番号は範囲確認調査分と本調査分を別にし、土器、陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品の順にそれぞれ通し番号を付した。図版もそれに従い同番号とした。

# 目

# 次

序

例言

第1章	はじめに	1
第1節	発掘調査に至る経過	1
第2節	調査の組織と構成	1
第2章	遺跡の立地と環境	4
第1節	立地と環境	4
第2節	歴史的環境	4
第3節	周辺遺跡	4
第3章	発掘調査の概要	7
第1節	遺跡の概観	7
1	遺跡の層序	7
2	遺物の出土状況	7
第2節	調査の方法	8
1	昭和53年度範囲確認調査	8
2	昭和56年度発掘調査	8
第3節	調査の経過	8
1	昭和53年度範囲確認調査	8
2	昭和56年度発掘調査	8
第4章	調査の記録	10
第1節	検出遺構と出土遺物	10
1	昭和53年度範囲確認調査	10
2	昭和56年度発掘調査	13
第5章	まとめ	34

# 第1章 はじめに

## 第1節 発掘調査に至る経過

蒲沼遺跡は昭和46年春、農道新設工事の際に発見され、南秋田郡八郎潟町蒲沼150-1他に所在し、秋田県遺跡地図に登録された、いわゆる周知の遺跡である。この地域が昭和54、55年度に実施される八郎潟地区の県営ほ場整備事業の地域内に入るため、昭和53年10月16日～21日まで、秋田県教育委員会が主体となって、遺跡の範囲確認調査を行い、昭和55年度実施地域の一部が遺跡である事が確認された。

その後遺跡地内の県営ほ場整備事業は延期され、県農政部より昭和56年度に実施する計画が提出された。その中で現水路を深くして拡幅または新設する計画があり、地下の埋蔵物に影響を及ぼすと考えられた。そこで秋田県教育委員会では工事に先立ち水路部分の発掘調査を行って記録保存を図り、今後の資料に資する事とした。

## 第2節 調査の組織と構成

遺跡名	蒲沼遺跡
遺跡所在地	秋田県南秋田郡八郎潟町蒲沼150-1他
調査期間	昭和57年6月1日～6月30日
調査対象面積	1,075㎡
調査面積	1,075㎡
調査主体	秋田県教育委員会
調査担当者	柴田陽一郎(秋田県埋蔵文化財センター)
調査補佐員	三嶋隆儀、佐藤雅子
調査協力機関	秋田県秋田農林事務所土地改良課 八郎潟町教育委員会 秋田県土地改良事業団体連合会
発掘調査参加者	草階金治、山内鎮雄、畠山正三、伊藤金作、伊藤鉄雄、小玉久、小林茂美、伊藤繁夫、伊藤義和、石井エミ、畠山恵作子、相馬チサ、伊藤トモエ、小柳ノリ、伊藤キミ、谷村アエ、相馬ヒデ子(順不同)
整理作業参加者	杉原敬子、奈良淳子、石上尚子、佐藤真智子、保坂千秋、松本千秋、三

浦るり子、大沢晶子、小林弘、進藤滋、茂木淳子、高橋紀美、越後谷晴  
美、武田美智子、藤井智子、池田リュウ子、佐藤せい子、高山比奈子、  
小松睦子（順不同）



## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 立地と環境

蒲沼遺跡は、奥羽本線八郎潟駅より西方約1km、南秋田郡八郎潟町蒲沼150-1他に所在している。本遺跡の周辺地形は、八郎潟残存湖に流入する最大河川である馬場目川が南方約1kmを西流しており、東方には森山、三倉鼻の丘陵がある。森山は鈴虫の群生地として知られる山である。南東方向には俎山、駒頭ヶ森を結ぶ丘陵があり、この二つの丘陵にいだかれたかっこうで湖東平野が広がっている。八郎潟残存湖東部の段丘及び河川の自然堤防が発達して、県内有数の水田地帯となっている。本遺跡も湖岸に近い水田地帯の中に位置している。

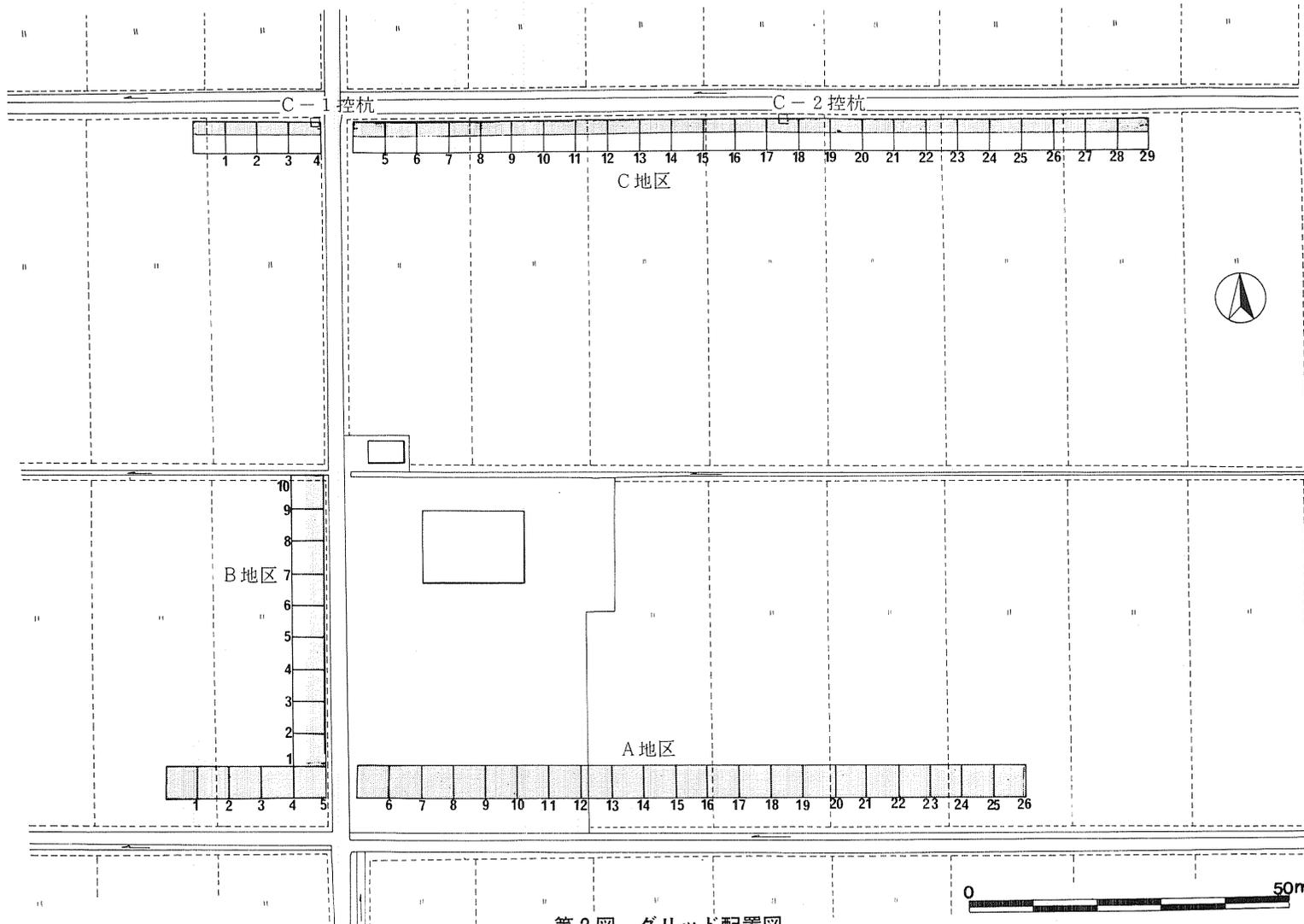
### 第2節 歴史的環境

蒲沼遺跡（第1図1）の発見は昭和46年春のことで、農道新設工事中に土師器が数点出土した。この遺跡からわずか約500m離れた所に蒲沼の碑と呼ばれている貞和5年銘の板碑があった。八郎潟町には板碑が多くあり、国道7号線沿いには真坂、夜叉袋、中島地区に板碑群が分布している。ほとんどが南北朝時代（14世紀中葉～後半）にかけてのものである。この板碑群を抜けて高岳山麓の標高約20mの所に、縄文時代中期の沢田遺跡（2）があり、昭和27年、31年に発掘調査された。その結果円筒上層A、B式、大木8a、8b、9式土器が発見された。沢田遺跡から北東方向へ約1kmほど行った所に室町末期の山城と考えられている浦城（3）がある。蒲沼遺跡から南東わずか200mほどの所には中世城館と考えられている押切城（4）があり、蒲沼遺跡との関連性がうかがわれる。五城目町にもこのような中世城館が散在している。

### 第3節 周辺遺跡（第1図）

蒲沼遺跡の周辺には、縄文時代から中世までの各時代の遺跡が多い。縄文晩期の遺跡として五城目町の下台遺跡（7）、同町中泉町遺跡（9）があり、土器の他石鏃、石匙、石斧等が出土している。弥生時代の遺跡は井川町の新聞A、B遺跡（14、13）があり弥生式土器の他、石鏃、石匙、磨製石斧が出土しており、靱痕のある土器片も見つかっている。県内で発掘調査された唯一の古墳として五城目町の岩野山古墳群（10、11）があり、昭和36年より38年と49年に発掘調査された。さらに蒲沼遺跡より南東2kmの所に、石崎遺跡（12）があり昭和47年に発掘

調査が行なわれ、柵列が発見された。出土遺物として、須恵器、土師器、紡錘車、木簡風木片、糸車等がある。この遺跡は秋田城以北に新たな柵跡が発見されたとして注目された遺跡であり、秋田郡衙跡の可能性があると考えられている。この他、古代の遺跡としては、五城目町の雀館古代井戸跡（8）、井川町小泉遺跡（15）がある。中世に入って、五城目町に砂沢城（5）があり昭和56年に発掘調査された。この砂沢城跡のふもと付近に砂沢窯跡があり、昭和41年に調査されたがその後消滅してしまった。



第2図 グリッド配置図

## 第3章

## 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

#### 1 遺跡の層序

蒲沼遺跡は八郎潟の残存湖から東に約1kmの地点にあり、かつてここは潟湖となった時期があったようである。現在南側約1kmに馬場目川が西流しているが、遺跡の北側約300mに馬場目川の旧河道があり、氾濫のたびごとに大量の沃土を運んだものと思われる。このため、遺跡の土層は、粘質土が主体であるが部分的に表土から約50cm下の3層と4層の間、5層の下に薄く砂層が入る地点もある。

遺跡の土層はおおむね以下のとおりである。

第1層 (厚さ10~15cm) オリーブ黒色 (5 Y 2/2) 粘質土。(耕作土)。

第2層 (厚さ15~20cm) オリーブ黒色 (5 Y 2/2) 粘質土。小礫を若干含む。陶磁器、木製品、土製品等が出土する。

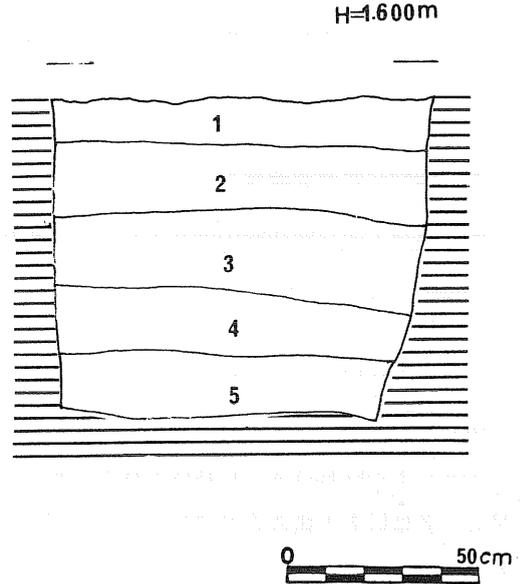
第3層 (厚さ15~20cm) 暗オリーブ灰色 (5 G Y 4/1) 粘質土。1、2層より青味が強く、硬く締まっている。古代の土器が出土する。

第4層 (厚さ10~15cm) 暗緑灰色 (7.5 G Y 4/1) 粘質土。この上に2~3cmの砂層の堆積が見られたりする。

第5層 (厚さ10~15cm) 暗緑灰色 (5 G 3/1) 粘質土。粘性は上層に比べ弱い。下部にいくにつれ小礫を含むようになる。

#### 2 遺物の出土状況

今回の調査では遺構は検出されなかった。しかし遺物は第2層から陶磁器、木製品、土製品などが出土し、その下の第3層からは須恵器、土師器が出土した。出土した遺物は点在しており、まとまった地点はない。



第3図 土層断面図

## 第2節 調査の方法

### 1 昭和53年度範囲確認調査

範囲確認調査は、昭和54、55年度県営ほ場整備予定地域内を対象として行った。調査期間は昭和53年10月16日から10月21日までであった。

調査の方法は任意の基準点を決め、それに従って平板で東西南北に延長し、10m毎に坪掘りを行った。必要に応じて土層断面図を作成し遺物出土状況等の写真撮影を行った。

### 2 昭和56年度発掘調査

本調査は上記の範囲確認調査に基づいて昭和56年6月1日から6月30日まで実施した。グリッド設定は秋田農林事務所土地改良課で設置したC地区のC-1控杭を基準点にして東のC-1-2控杭を結び東西の基準線にして、それをA、B地区に延長した。グリッドは5m×5mで設置した。水路幅は、A・B・C地区がそれぞれ5m、3m、2mなのでその幅に従って調査を実施した。

グリッドの呼称はA、C地区が西から東に、B地区は南から北にそれぞれ算用数字を1から付し、各地区名と組み合わせて用い（A-1、C-1など）グリッドの南東隅をグリッド名とした。

## 第3節 調査の経過

### 1 昭和53年度範囲確認調査

範囲確認調査は昭和53年10月16日から10月21日まで実施した。対象地域は昭和54、55年度の県営ほ場整備事業予定地域で、対象面積は約20,000㎡であった。昭和54年度分をA地区、昭和55年度分をB地区とした。遺跡地内は水田で湧水がひどく、発掘作業は困難を極めた。遺物はA地区では全く検出されず、B地区でまばらに出土した。出土層位はいずれも粘質土で第2層からは陶磁器、木製品、第3層からは土師器、須恵器が出土した。南側では、第3層が1m以上もあり、遺物が出土しなかったので調査対象区外とした。

調査の結果、昭和55年度ほ場整備地域内の一部で、現在牛舎の建っている所を中心にして遺跡の範囲を推定した。

### 2 昭和56年度発掘調査

調査期間は6月1日から6月30日までの1ヶ月間実施した。発掘調査に先立ち、5月27日より

り杭打ちを行ない、5月29日にプレハブが建てられた。

6月1日機材を搬入し、C地区から調査を開始した。II層中より陶磁器、木製品が出土した。雨期で湧水がひどい。6月4日、C地区を終了した。遺物は陶磁器片・木製品が少量ながら出土した。

6月5日、B地区の調査に入る。6月6日、夜来の雨で既発掘区がぬかるみの状態の為、排水溝を掘り水を抜く作業を行った。

6月8日、A地区の調査に入る。A-5グリッドで墨書のある須恵器杯が出土した。水路幅が5mと広く、また湧水の為作業が思うように進まなくなった。6月12日、A-6、A-7グリッドに残っていた建物跡のコンクリートの土間をブルで除去した。その後、杭打ち作業を行う。6月19日、雨が降り続き周りの水路から水があふれ、作業に支障をきたす様になったので、発掘区の周囲に排水溝を掘る。6月22日、23日、終日雨の為作業を中止し、プレハブで遺物の洗浄・注記を行う。6月24日、A-16グリッド付近で陶器、木製品の出土が多い。6月25日、森山から遺跡の遠景の写真撮影を行う。6月29日、調査の全てを終了し、同30日にプレハブの解体、遺物の運搬をして全ての調査を終了した。

## 第4章

## 調査の記録

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1 昭和53年度範囲確認調査

##### 検出遺構

遺構は検出されなかった

##### 出土遺物

調査では土師器、須恵器、陶磁器、土製品、木製品が出土した。

##### 土器

###### 土師器杯（第4図の6・図版7の6）

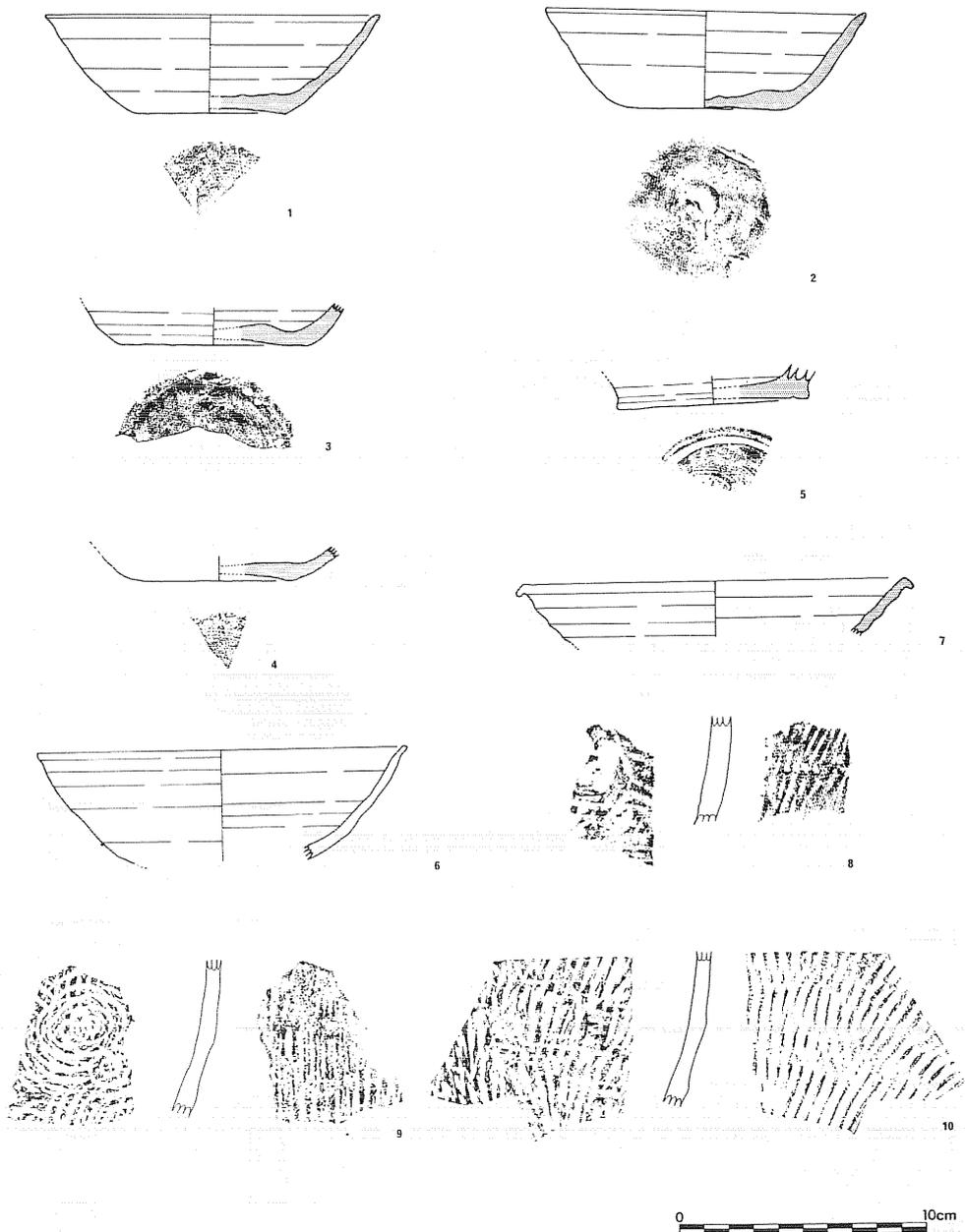
全体の約 $\frac{1}{2}$ の体部が残存している。体部は外傾気味に立ち上り、口縁部はわずかに外反している。口径は約15cmと推定される。内外ともに明瞭にロクロ痕が残る。色調は浅黄橙色を呈し焼成は良好である。

###### 須恵器杯、皿（第4図の1、2、3、4、5、7図版7）

1は底部からゆるやかに外傾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反している。底部は回転糸切り離しである。口径13.6cm底径6.0cmで口径に対する底径の比率は0.44である。胎土焼成とも良好で色調は青灰色を呈す。2は口縁部をわずかに欠くが完形に近いものである。底部からゆるやかに立ち上がり体部でわずかに丸味を帯び、口縁部はわずかに外反している。口径13.0cm、底径6.2cmで口径に対する底径の比率は0.47である。底部は肉厚な感じで、回転ヘラ切り離しの後、底部から体部下半にかけてナデを施している。3、4、5は杯底部で3は残存部が $\frac{1}{3}$ 、4、5は $\frac{1}{2}$ である。3は回転ヘラ切り離しで、胎土、焼成とも良好で色調は青灰色を呈す。4は回転糸切り離しで、胎土、焼成は良好で灰白色を呈す。5の底部は回転糸切り離しの後、端部を調整しており、一条の沈線を巡すことで低い高台風に仕上げている。7は体部がゆるやかに立ち上がり口縁部が大きく外反している。高台のついた皿形を呈すると思われる。

###### 須恵器甕（第4図の8・9・10 図版7）

8は焼成不良で白っぽい色をしている。外面にわずかに縄目のタタキ目がみられる。9は外面に縄目のタタキ目が、内面は青海波文である。10も外面に縄目のタタキ目がある。胎土、焼成は良好で青灰色を呈す。

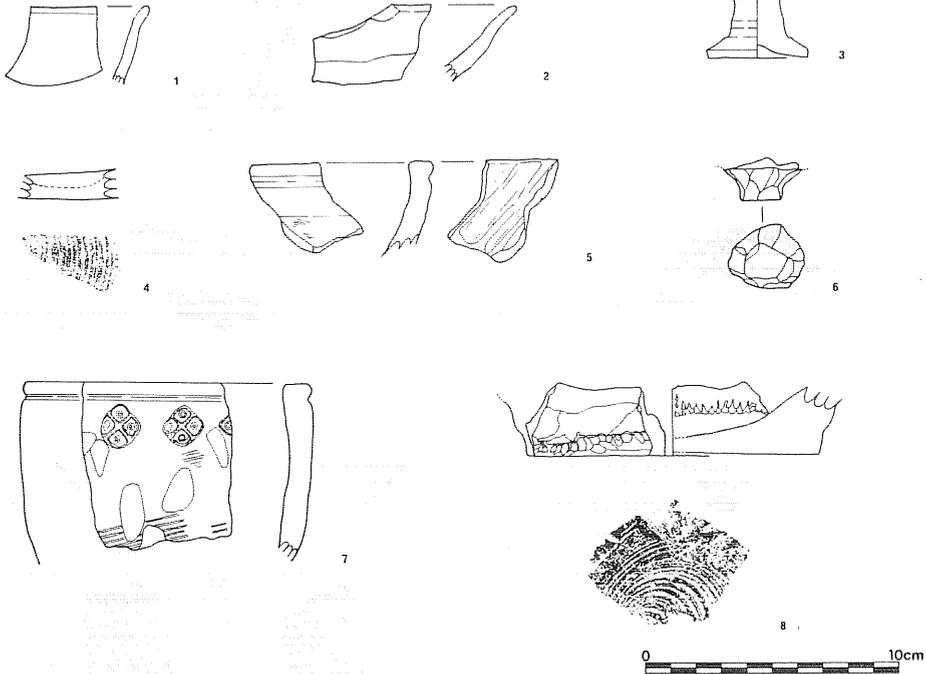


第4図 範囲確認調査出土土器

陶磁器（第5図の1～8、図版7）

1、2は唐津系の陶磁器である。1は灰白色を呈し、胎土は灰色で精選されている。碗と思われる。2は内外面に灰釉がかかっているが、外面の体部下半は釉がかかっていない。3は中国製の白磁で高杯である。色調は淡灰色を呈し、台部底面には施釉がない。台部底面をていねいに削り出している。4は底部のみである。糸切りで釉は茶色を呈する。5は無釉の陶器で内

外面とも赤褐色を呈す。内面の斜め方向に整形痕が残る。7は無釉の陶器で淡黄色である。外面に刻印を施している。8は底部が糸切り離して外面は部分的に茶色で内面は淡黄色を呈す。6は淡灰色の脚で周囲に粗い整形を施している。



第5図 範囲確認調査出土陶磁器

**土製品** (第6図1、3、4、図版8)

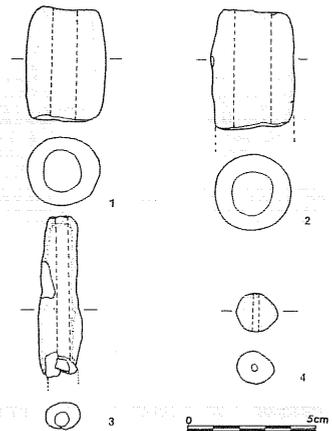
いずれも土錘である。1は浅黄色で筒形である。重さは43g、長さは43mm、胴径は31mmである。

**陶製品** (第6図2、図版8)

2は陶錘でにぶい黄褐色を呈している。重さは45g、長さは46mm、胴径33mm、孔径は16mmである。

**木製品** (第7図、図版8)

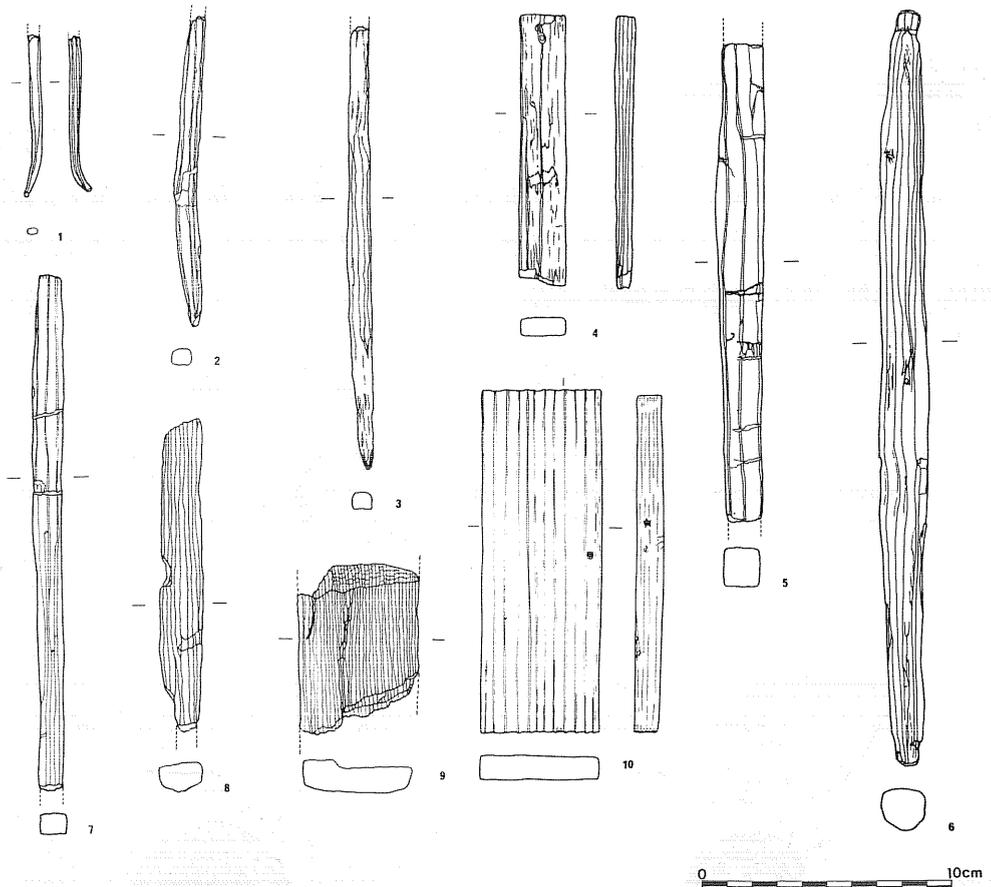
1～3は箸でいずれも途中で折れている。2は断面が長方形で先端部を削っており、わずかに焼けている。現存部の長さは12.5cm、幅は0.8cmである。3も先端をきれいに削っている。先端部は焼けて、断面はほぼ四角に近い。現存部の長さは17.8cm、幅は1.0cmである。4は付札と思われる。端部に孔をあけている。現存部の長さ10.8cm、幅は1.9cm厚さは0.5cmである。6は長さが30cmで、両端を細くしてくぼめている。何かを巻きつけた痕跡がある。7は



第6図 範囲確認調査出土土製品

篙木である（註1）。断面は四角形を呈す。5、8、9、10は全体の形、用途が不明である。

註1 用便を済ませた後に尻を拭いたものであるという。秋田県立博物館館長 奈良修介氏に御教示いただいた。



第7図 範囲確認調査出土木製品

## 2 昭和56年度発掘調査

### 検出遺構

遺構は検出されなかった。

### 出土遺物

調査では土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品が出土した。

### 土器

#### 土師器杯（第8図の3、図版9）

底部からわずかに丸味をもって立ち上がる。底部は回転糸切り離し、内面にロクロ痕が残り外面はわずかにその痕跡を残している。口径12.7cm、底径 5.3cmで口径に対する底径の比率は

0.41である。胎土は普通、焼成はやや不良で、色調は浅黄橙色を呈す。

**土師器甕**（第8図1、2、図版9）

1、2とも底部で、1は底部からやや外傾気味に立ち上がる形と思われる。2は底部外面に成形のあとがあるが、デコボコしている。底部からやや外反しつつ立ち上がる形と思われる。

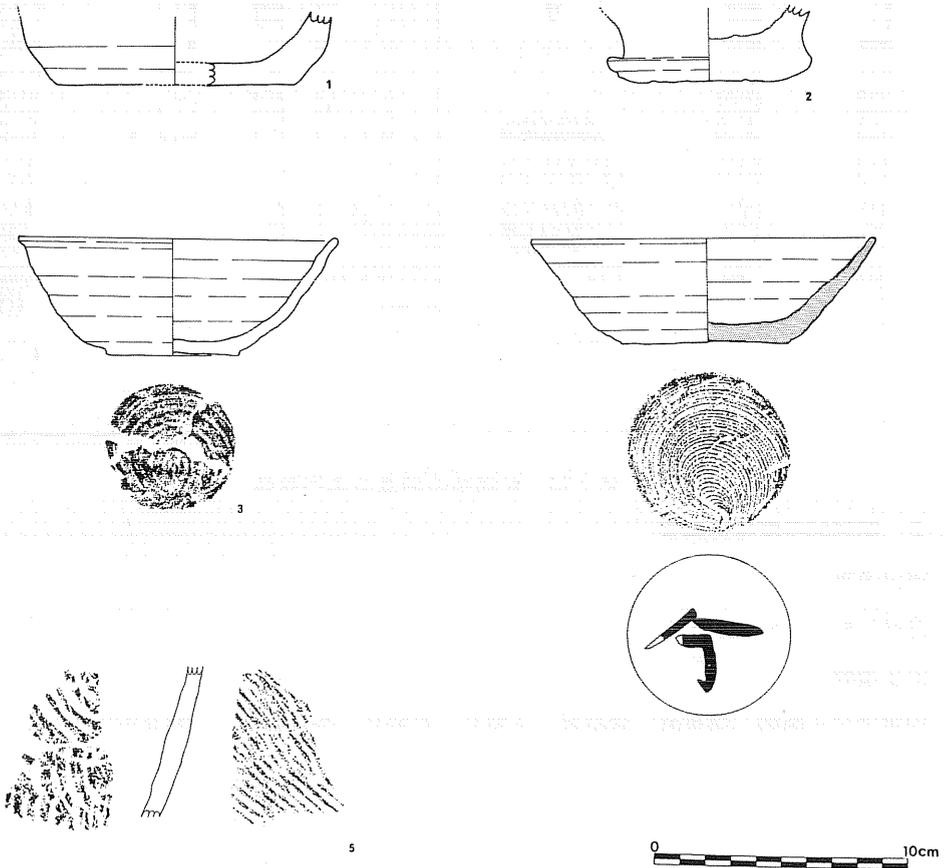
1、2とも色調はにぶい黄橙色を呈す。

**須恵器杯**（第8図4、図版9）

口縁部をわずかに欠くが完形に近いものである。底部からゆるやかに外傾しながら立ち上がる。底部は回転糸切り離しで、「今」の墨書が認められる。全体的に器厚があり他の土器に比べて安定感がある。口径13.6cm、底径6.5cmで口径に対する底径の比率は0.48である。胎土、焼成とも良好で色調は灰白色を呈す。

**須恵器甕**（第8図5、図版9）

外面に縄目のタタキ目があり、内面は青海波文である。焼成不良で赤褐色を呈す。



第8図 出土土器

## 陶磁器

初期伊万里染付、唐津系施釉陶器、瀬戸系施釉陶器、舶載陶磁器等が出土した。

### 初期伊万里染付（第9～11図1～22、図版10、第1表）

細片が多く、完形品は全くなかったができるだけ図示した。これらの中から特徴的なものをあげると次のとおりである。1～14は碗である。1は草花文と思われ、鮮明な藍色で器面は他の染付と比較して、やや白っぽい。3は網文で、器厚が全体的に厚く安定感がある。5も底部から腰部にかけての器厚が厚い。器面はやや凸凹があり、くすんだ淡灰色を呈している。7は他の碗に比較して底部から腰部にかけての立ち上がりが緩やかである。全体に貫入が入る。9の文様は鮮明な青色で、深めの削り出し高台である。10は他のものに比較して底径が大きく、底部から腰部にかけての立ち上がりが緩やかである。高台畳付は無釉で砂粒が付着している。11は高台が低く、底部が厚い。高台畳付には釉がなく、砂粒が付着している。12は比較的深みのある碗である。高台畳付には釉がなく、砂粒が付着している。14は口縁部付近の破片である。12とほぼ同じ器形と思われるが、器厚は比較的薄い。15～19は口縁部の破片であるが、皿形を呈するものと思われる。22は内面に釉を施さないものである。21は高台畳付に砂粒が付着している。22は全体に釉ののりが悪く、器面がややデコボコしている。

第1表 出土染付一覧表

挿図番号	名 弥	時 代	器 形	グリッド名	遺物番号
1	初期伊万里染付	江戸初(17C前半)	碗	不 明	24
2	"	"	"	A-2	21
3	"	"	"	C-23	20
4	"	"	"	不 明	19
5	"	"	"	A-22	26
6	"	"	"	不 明	23
7	"	"	"	A-19	18
8	"	"	"	不 明	33
9	"	"	"	B-1	27
10	"	"	"	B-4	22
11	"	"	"	A-25	28
12	"	"	"	A-21	17
13	"	"	"	A-3	43
14	"	"	"	A-27	25
15	"	"	皿	B-5	51
16	"	"	"	不 明	29
17	"	"	"	A-2	38
18	"	"	"	A-25	34
19	"	"	"	B-9	31
20	"	"	"	A-15	37
21	"	"	"	A-1	45
22	"	"	"	不 明	30

### 唐津系陶器（第12～13図23～36・図版11、第2表）

計15点出土しているが完形品はなく、器形が不明のものも多い。23は外面が赤褐色を呈し、内面と高台畳付には釉を施さない。腰部に明瞭な段を有する。24は灰釉を内面と外面の腰部まで施す。高台や底裏に明瞭なロクロ成形痕がある。皿と思われる。25は内面に釉は施さず、ロクロ成形痕が明瞭に残る。外面は淡黄色の釉で貫入が入る。28は内面に成形の際の段を明瞭に残し、釉は青みがかった茶色か淡い茶色を呈す。重ね焼きの跡が残っている。外面は無釉で底

部よりやや上に足が付いていて緩やかに立ち上がる。器形は盤であろうか。29は内面と外面上半に釉がかかり茶色を呈し、器肌はザラザラしている。口縁部の下に口が付いていたもので片口鉢である。32は釉が灰色で見込み部に重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。削り出し高台で、高台内面と底裏には釉が部分的にかかる。33は釉が内面で淡茶色が濃茶色で、外面は灰白色の上に茶色の濃淡で文様を表現している。34は外面が茶色がかった淡黄色で流線的な文様を表現している。36は、播鉢の底部付近で、内面の下はかなり磨滅している。外面は茶色がかった黒色を呈する。

第2表 出土唐津系陶器一覧表

挿図番号	名 称	時 代	器 形	グリッド名	遺物番号
23	唐津系陶器	安土・桃山(16C後半)	皿	A-18	1
24	"	"		A-25	5
25	"	"		C-3	2
26	"	"		C-1	11
27	"	"		A-14	40
28	"	"		A-19	10
29	"	"		C-11	3
30	"	"		A-18	9
31	"	"		B-5	52
32	"	"		A-20	16
33	"	"	B-4	78	
34	"	"	不 明	36	
35	"	"	皿	B-7	12
36	"	"	播 鉢	B-5	68

瀬戸系陶器 (第14図45、図版12、第3表)

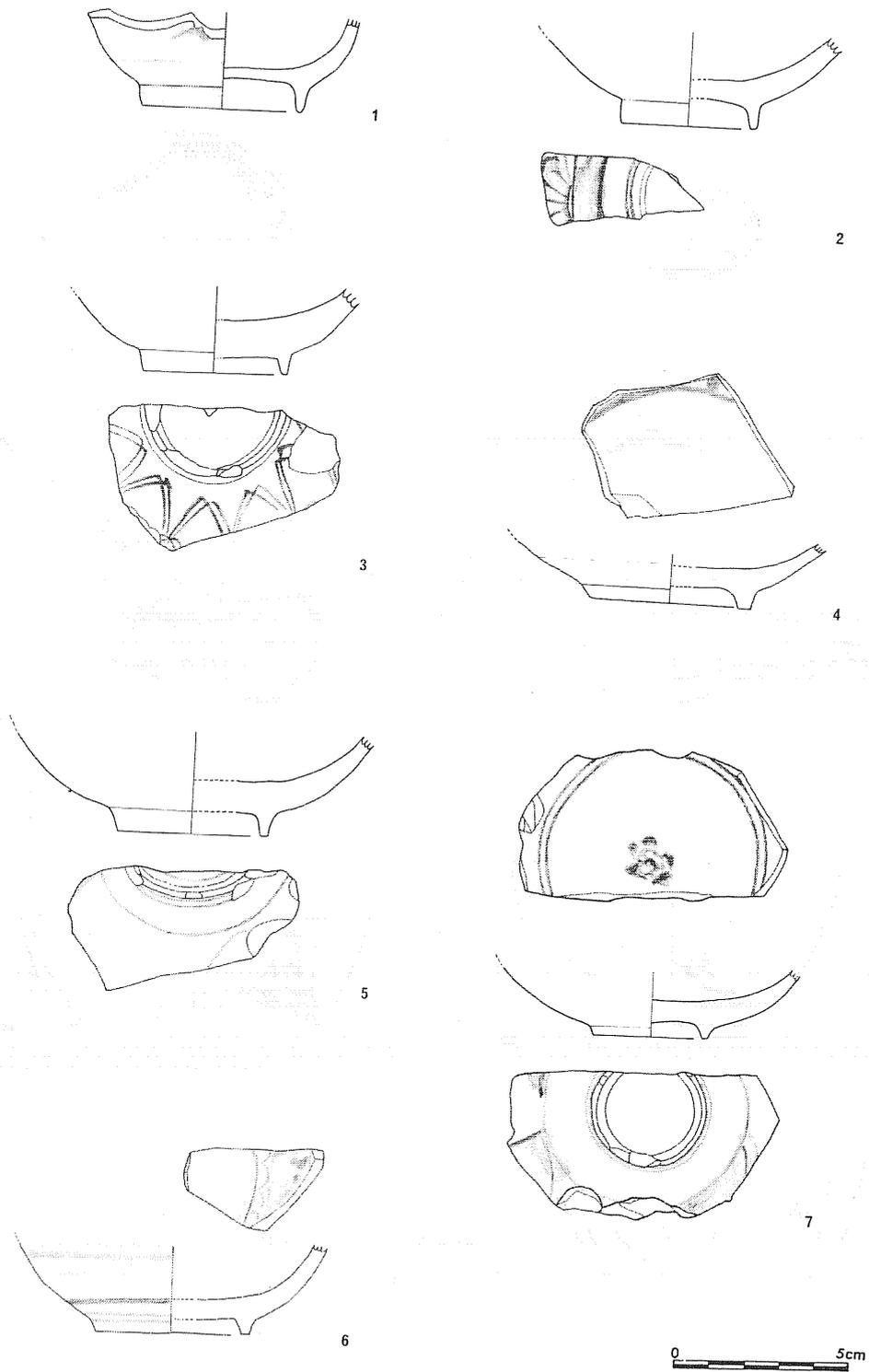
45の1点だけである。底部は糸切り痕を残し、外面だけ淡い茶色の釉を施す。釉は薄くむらがある。

舶載陶磁器 (第14図37~44、図版12、第3表)

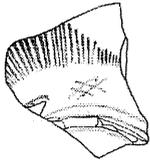
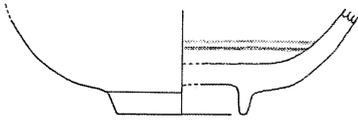
37~39は中国製の白磁である。37は高台部の破片で、釉調は灰色がかかった白である。39は口縁部で、淡い青色である。37、39は皿と思われる。38は腰部から急な立ち上がりを示すもので、外面には成形の稜が明瞭に残る。内外面とも青灰色で、外面は釉ののりが悪く部分的に器肌が見えている。

40~43はいずれも明未の製品で、40、41は緑釉陶器である。40は内面が緑がかかった淡黄色で見込みには重ね焼きの跡が残る。外面は体部から腰部まで灰白色の釉がかかっている。41は内面が淡緑色が深みのある緑色で見込みに重ね焼きの跡が残る。外面は体部から腰部まで釉がかかり、くすんだ灰白色を呈している。42は暗緑釉陶磁器で土瓶の注口部付近と思われる。注口が欠けている。器厚は薄く、外面にのみ釉を施す。43は輪花皿で釉は灰色がかかった浅黄色で、高台及び内面の見込みまでは及んでいない。全体に貫入が入る。外面の腰部と内面の口縁部下から見込みまで彫刻刀状のもので縦に幅4mmの長く浅い削りを施しているが、それが全体を回るものと思われる。

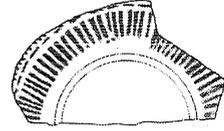
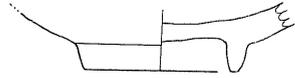
44は朝鮮系の白釉陶器で高台部のみが残存している。釉は全体に不均一で気泡が入って小さ



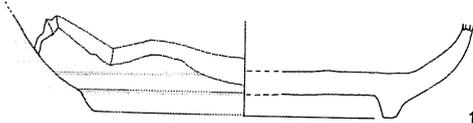
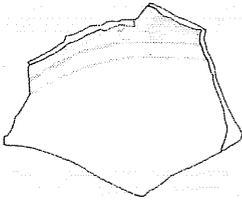
第9图 出土染付



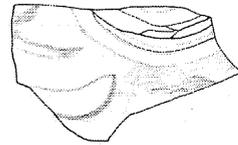
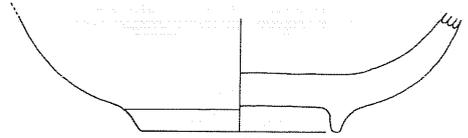
8



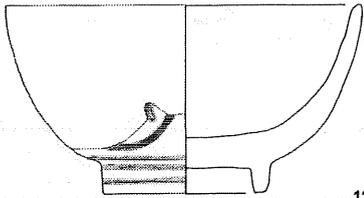
9



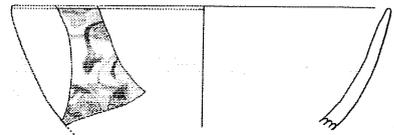
10



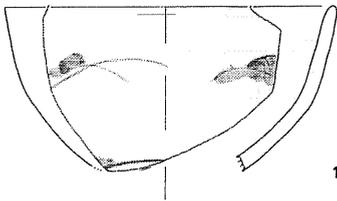
11



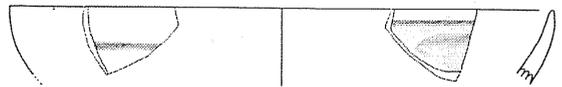
12



13



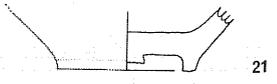
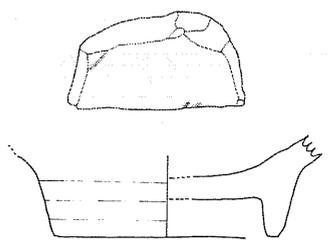
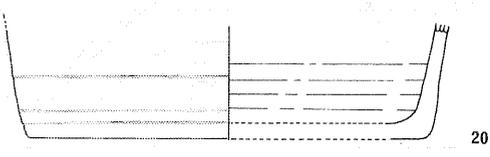
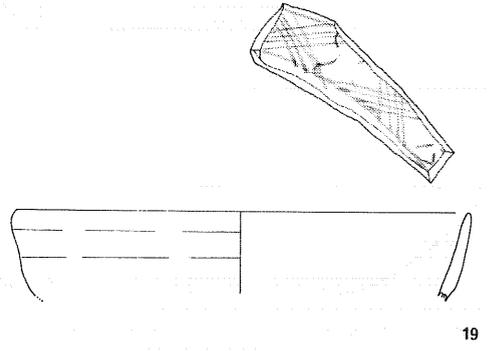
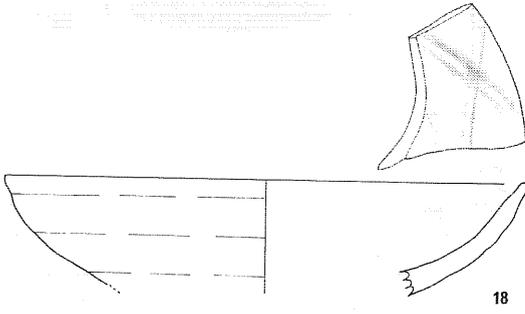
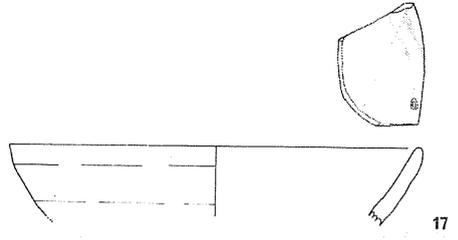
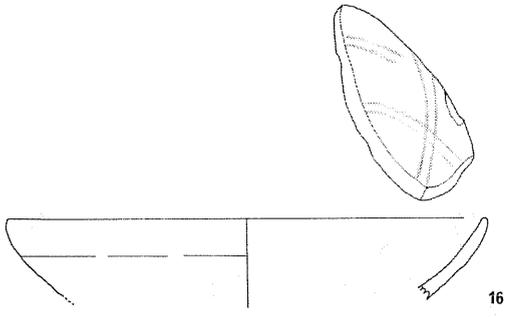
14



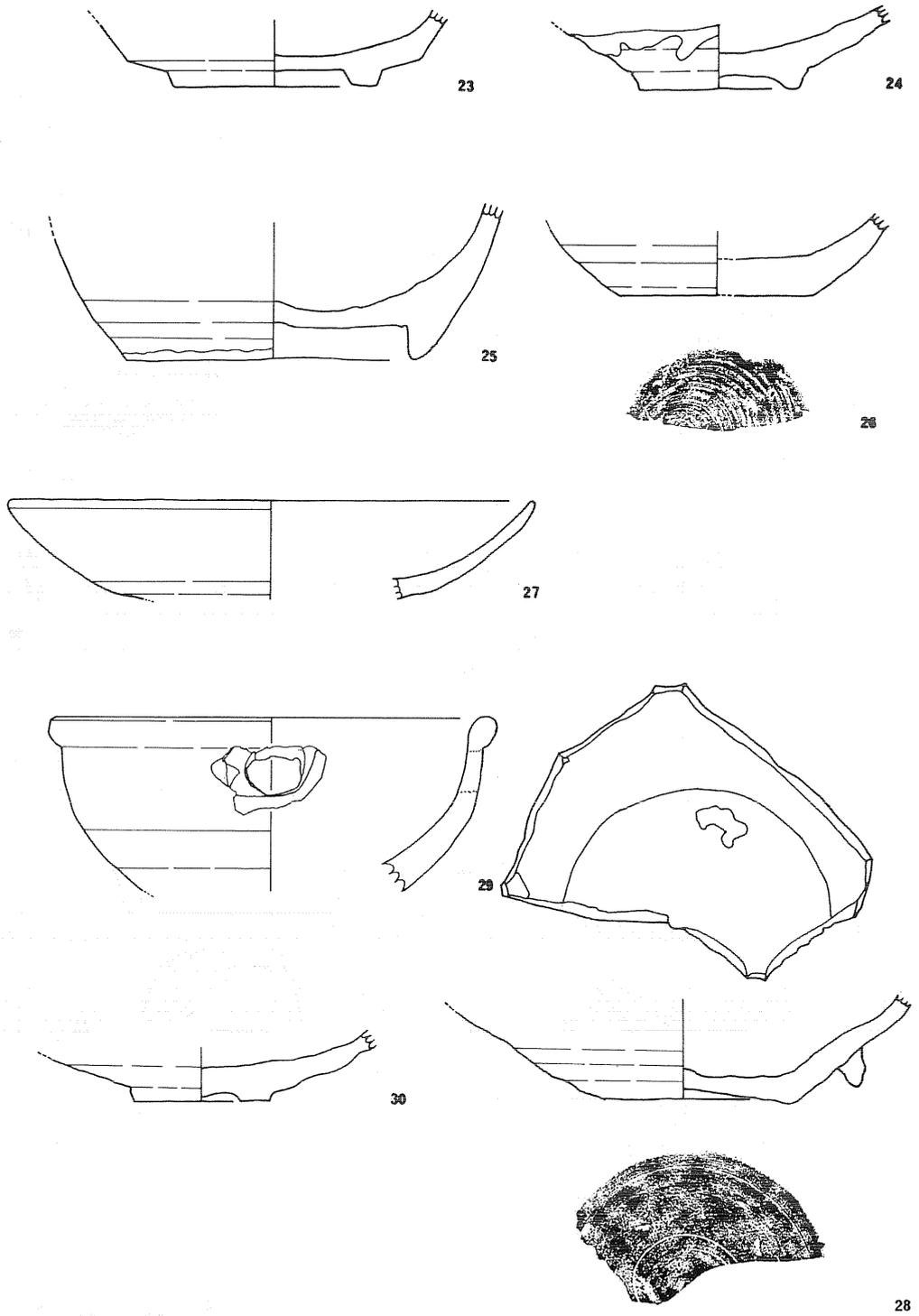
15

第10図 出土染付

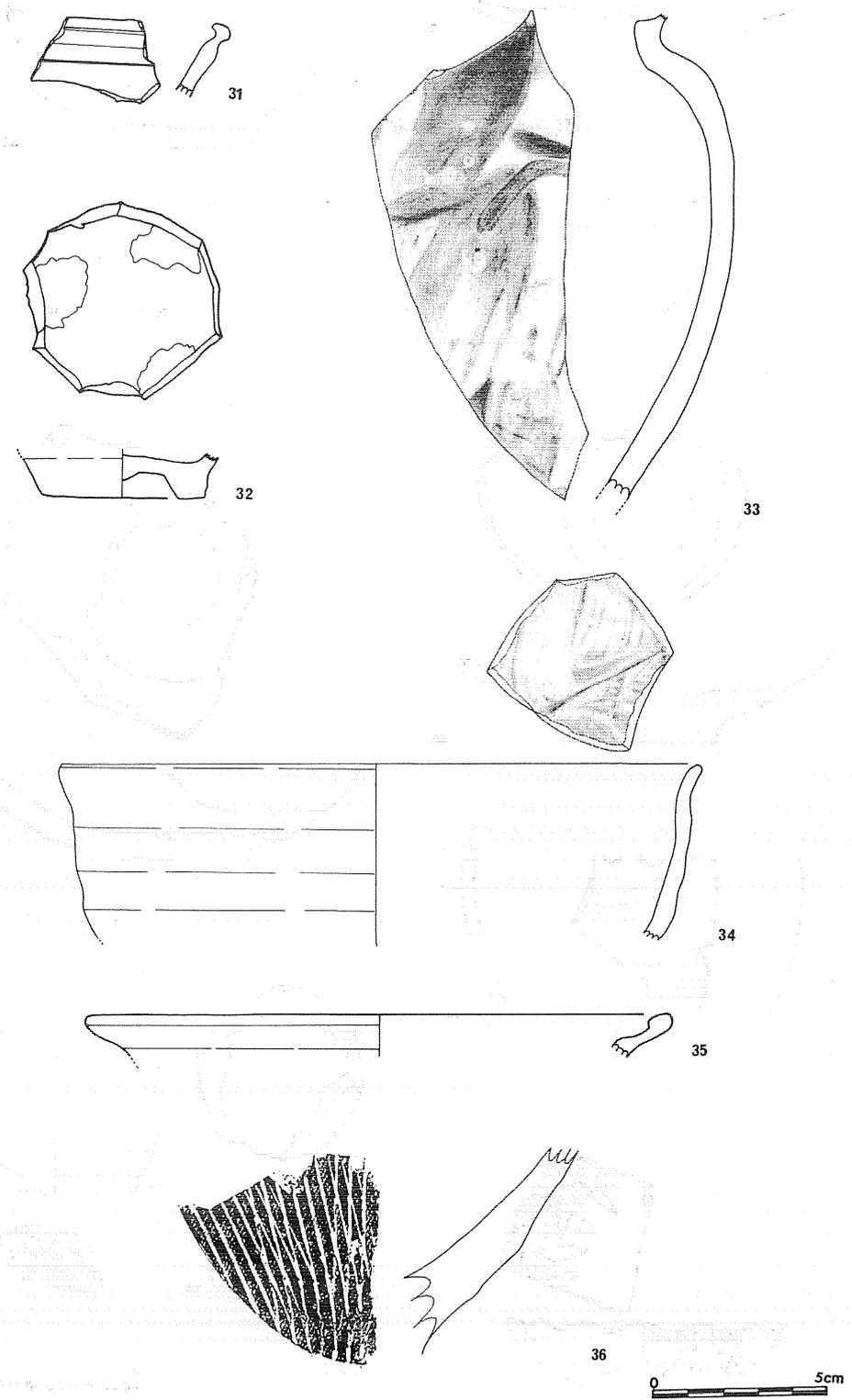




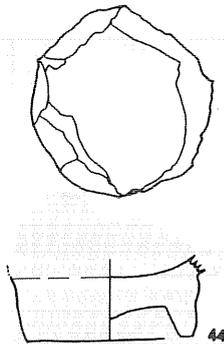
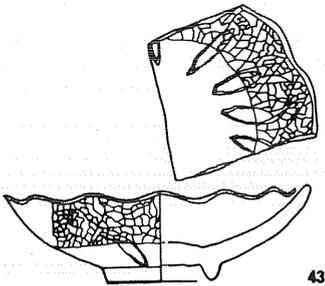
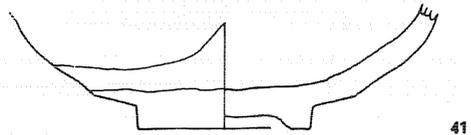
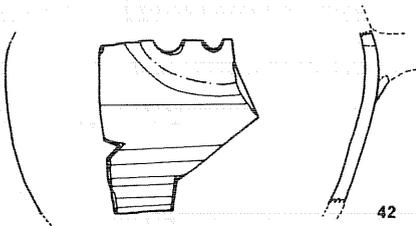
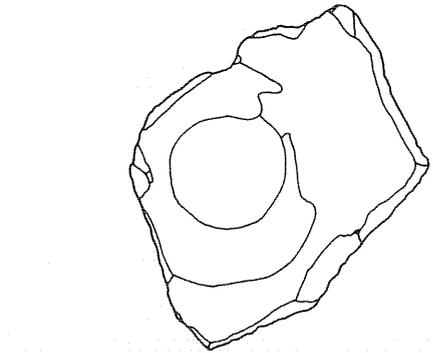
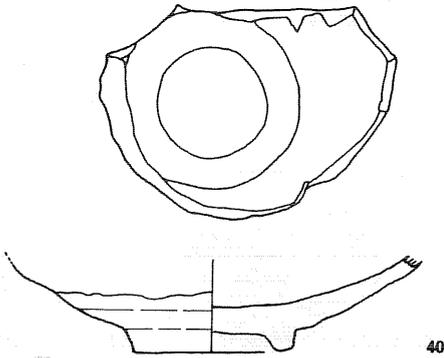
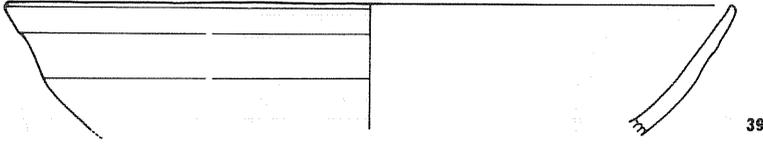
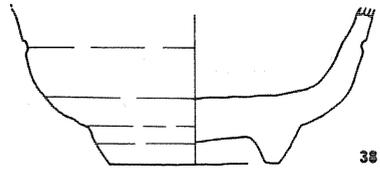
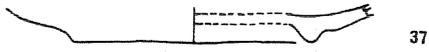
第11図 出土染付



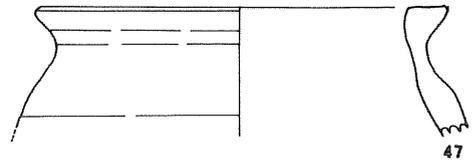
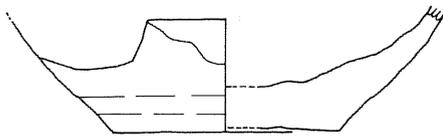
第12图 出土唐津系磁器



第13图 出土唐津系陶磁器



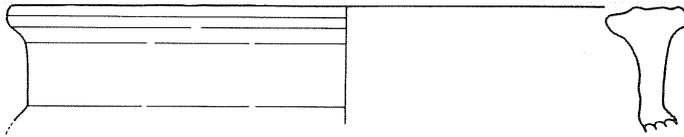
第14日 出土船載陶磁器・その他



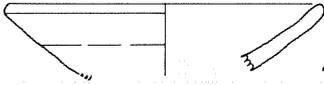
47



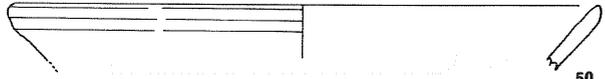
46



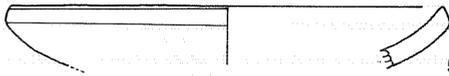
48



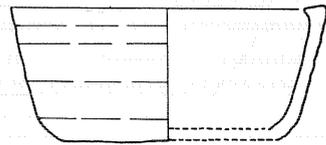
49



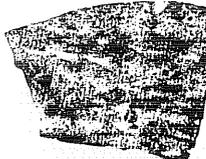
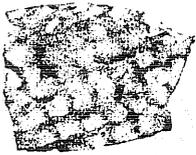
50



51



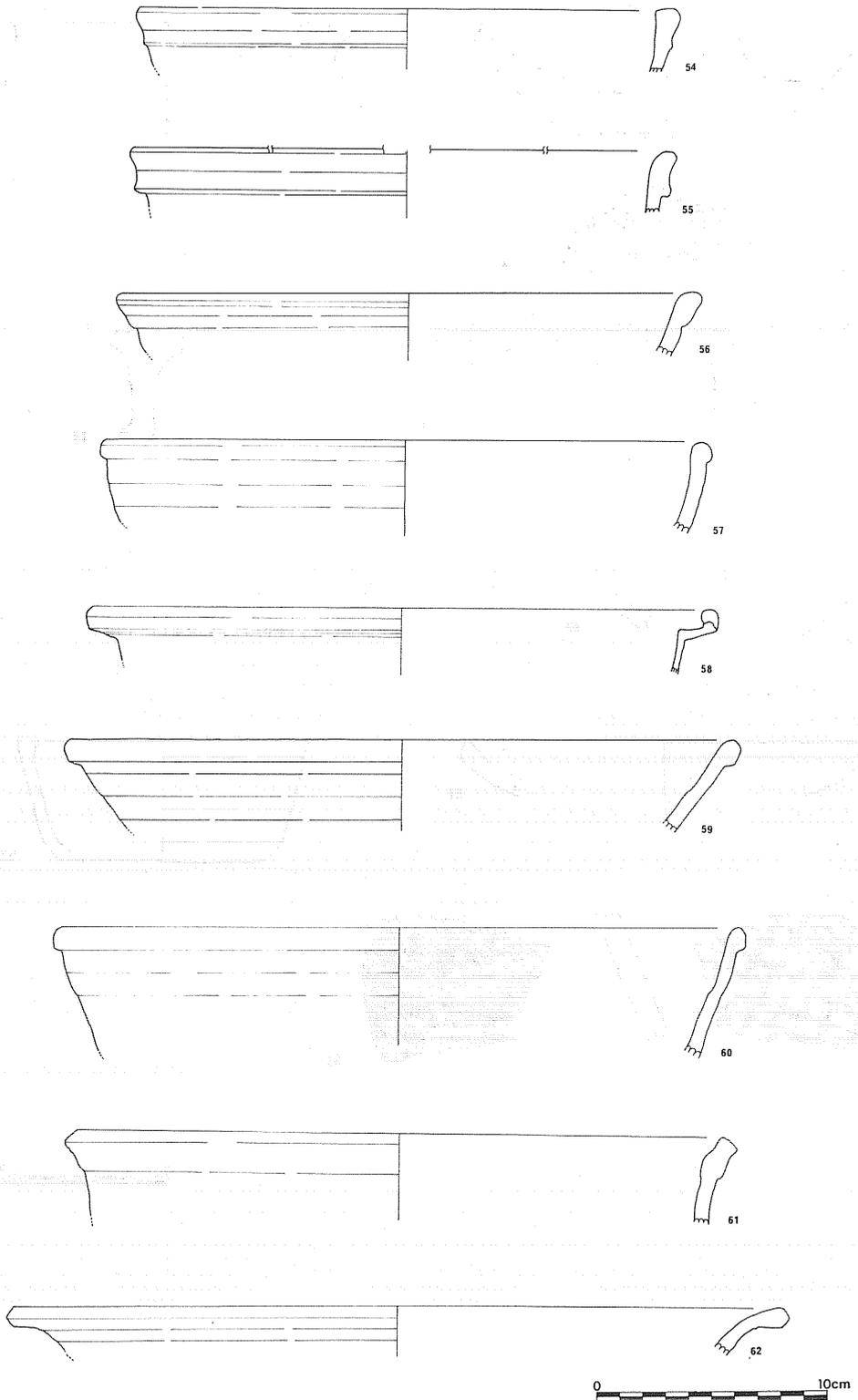
52



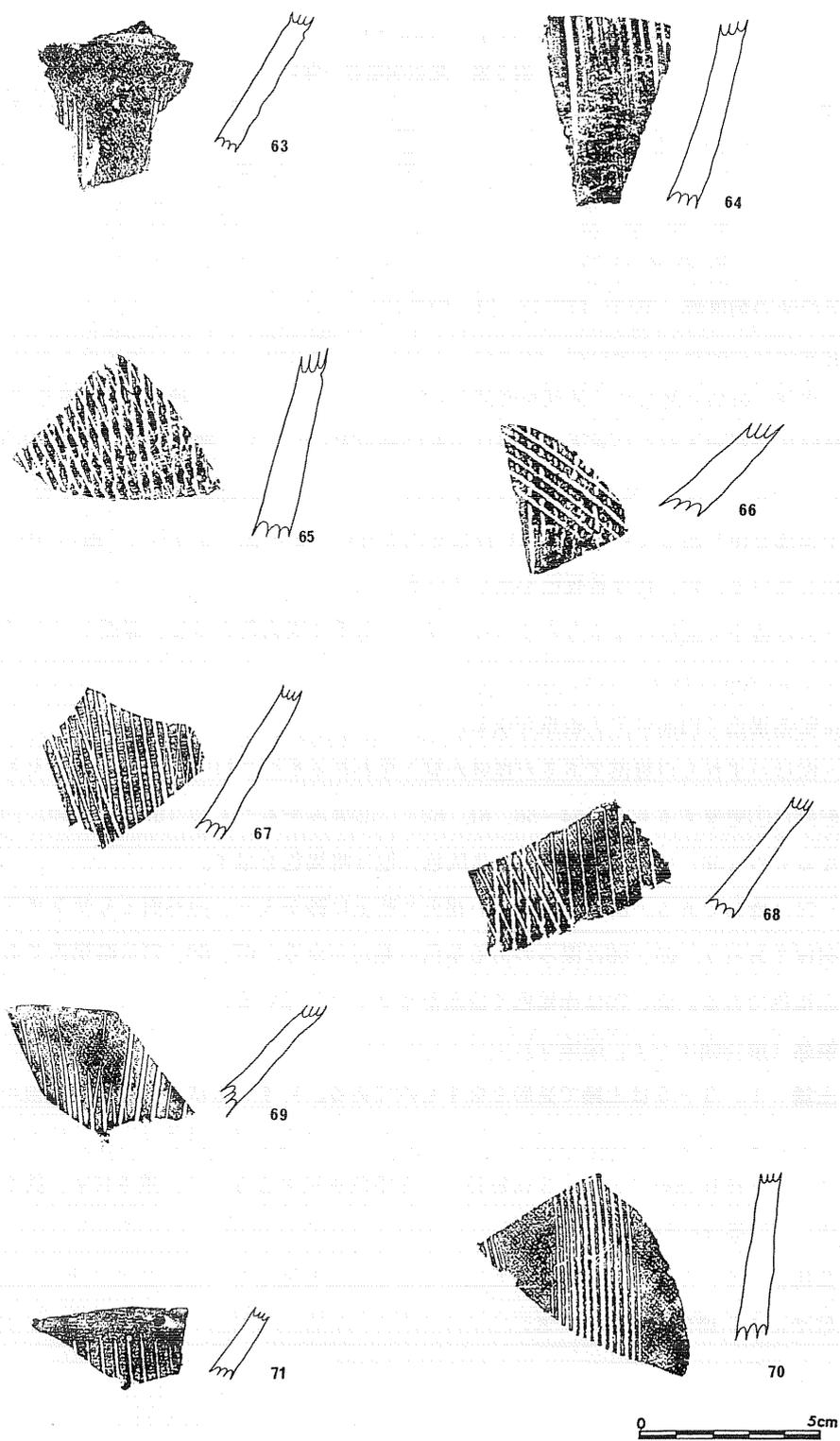
53



第15図 その他の出土陶磁器



第16図 その他の出土陶磁器



第17图 出土插針

い孔があき、砂粒が付着している。畳付は無釉である。

第3表 船載陶磁器一覧表

挿図番号	名 称	時 代	器 形	グリッド名	遺物番号
37	明 白 磁	明	皿	A-3	35
38	明 青 磁	明		A-26	7
39	明 白 磁	明	皿	C-19	39
40	明 白 緑 釉	明末(16C後半17C初)	碗	A-16	8
41	明 緑 釉	"	"	A-23	6
42	明 暗 緑 釉	"	土 瓶	A-17	79
43	明 輪 花 皿	"	皿	A-9	14
44	朝 鮮 系 白 釉 器			C-14	15
45	瀬 戸 陶 器			C-19	4

その他の陶磁器 (第15~17図46~71、図版12)

産地未詳の陶磁器が多いが、46~48は県内産の五城目焼である可能性が考えられる。

46は底部が糸切り離して、体部が底部から緩やかに立ち上がる。釉は内面が茶色でその上に黒と暗緑色の釉がまだらにある。外面は一部に釉が流れている。器肉は厚く、胎土には砂粒が混入している。47は壺で胴部がふくらんで口頸部ですぼみ、口縁部をつまみ出す様にして幅1.3cmの平坦部を作り出している。48は口縁部を内と外につまみ出すようにして幅2.2cmの平坦部を作り出している。47、48は茶褐色を呈している。

49~51は薄手で皿形になるものである。52は、薄手で灰白色を呈し、器面がザラザラしている。

53は暗赤褐色で内面にアテ板痕が残る。

54~62はいずれも口縁部であるが播鉢か盤と思われるもので口径が23~33cmと大きい。口縁部の形態は①肥厚するもの(54~56、61、62)、②丸みをもつもの(57、59、60)、③くの字状になるもの(58)などがある。57は青灰色、他は暗褐色を呈す。

63~71は播鉢である。63、64はにぶい褐色で胎土に砂が入り、内外面ともザラザラしている。同一個体であろう。65、66は深みのある茶色の釉がかかる。67、69、71は暗褐色である。68、71は赤褐色である。68、70は赤褐色で器面がザラザラしている。

土製品 (第18図1~7、図版9)

土錘 1、3~5は土錘で筒形をなすものである。いずれも浅黄色で胎土に細かい砂粒を含む。1、4、5は半分以上欠損しているが、3はほぼ完形品で重さは50g、長さ53mm、胴径は31.5mm、孔径10.5mmである。2は細長く、赤褐色を呈するもので、重さ10g、長さ53.5mm、胴径15mm、孔径は4.4mmである。

貝風呂 6、7とも脚及びその周辺に丁寧な成形を施している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好でにぶい橙色を呈している。

石製品 (第19図、図版9)

砥石 1は欠損しているが長方形を呈するものであろうか。片面と側辺には擦った痕跡がみられ、欠損部付近に2個の穴を穿っている。石質は泥岩である。2は全面の上下に擦った痕跡

がある。石質は凝灰岩である。

**硯** 1点だけ出土した。3は外提部が欠けて中ほどが窪んでいる。全体に擦った痕跡が見られる。後に砥石として転用したものであろう。石質は泥岩である。

**金属製品** (第20図1～12、図版13)

**鋸** 2は鋸と思われるもので長さ5cm、幅1.0cmである。中ほどに鋸穴を有している。

**鎌** 3は全長8.3cm、刃部5.7cm、柄部が4.2cmである。

**釘** 7は頭が丸い鉄釘で先端部が曲っている。全長13.5cm、幅0.5cmである。

**キセル** 2本出土している。11は雁首部の長さ6.8cm、吸口部6.25cmである。10は雁首部だけであるがその長さは7.4cmと11より長い。

**古銭** 12は寛永通宝である。

**その他の金属製品** 1は両端を欠くが、形状は鋸と良く似ているもので内側の中ほどに鋸が打たれている。4、6は突き刺す時に使われたものと思われる。6は茎の部分が細く中ほどが太くなるものである。8は取手状の鉄製品である。鋸が中ほどの2ヶ所に打ち込まれておりそれと並んで間に鋸跡2穴がある。9は銅製であるが残片の為詳細は不明である。

**木製品** (第21図1～36、図版14)

**底板(蓋)** 桶か樽、曲物の底板あるいは蓋と考えられるもので合計8点出土した。4は完形品であるが、他は半分かそれ以下しか残っていない。2、3、4は小形の曲物の底板である。

第4表 出土底板(蓋)一覧表

挿図番号	グリッド名	径(cm)	厚さ(cm)	遺物番号	備考
1	C-2	11.6	2.5	19	
2	A-8	9.9	0.8	1	曲物の底板 曲物の底板 曲物の底板
3	A-3	10.25	1.0	5	
4	B-9	6.5	1.2	7	
5	C-15	12.5	1.3	3	
6	C-19	17.4	1.3	15	
7	B-5	19.7	1.3	13	
8	A-26	19.5	1.4	27	

**下駄** 9は連齒下駄で4分の1以下しかない。前は丸くなっており、円形の鼻緒孔がある。裏には齒の痕跡が見られる。

**露卯下駄差齒** 10、11はいずれも下方に広がる差齒である。10は長さ10.5cm、幅12cm、厚さ1.5cmで、11は長さ9.0cm、幅12cm、厚さ1.5cmとほぼ似た数値である。

**箸** いずれも途中で折れているものばかりで全体の長さがわかるものはない。断面は丸いものと四角のものに分かれる。12～15、18は箸の端部を削って尖らせている。

第5表 出土箸一覧表

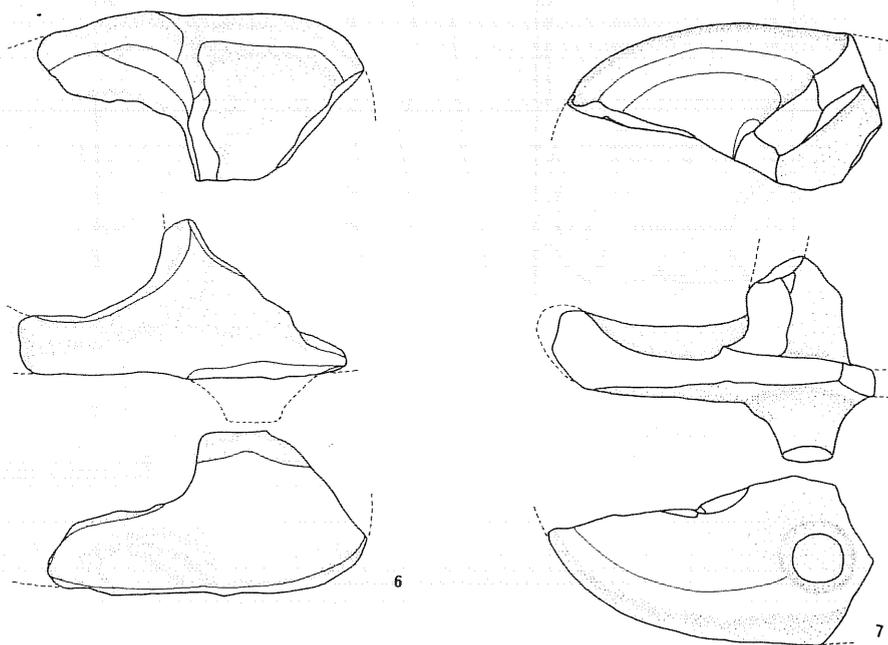
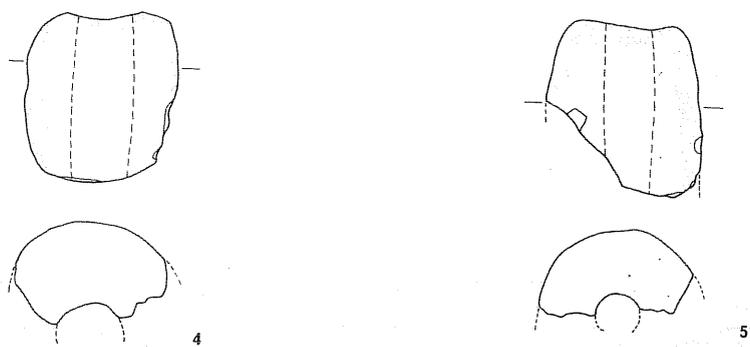
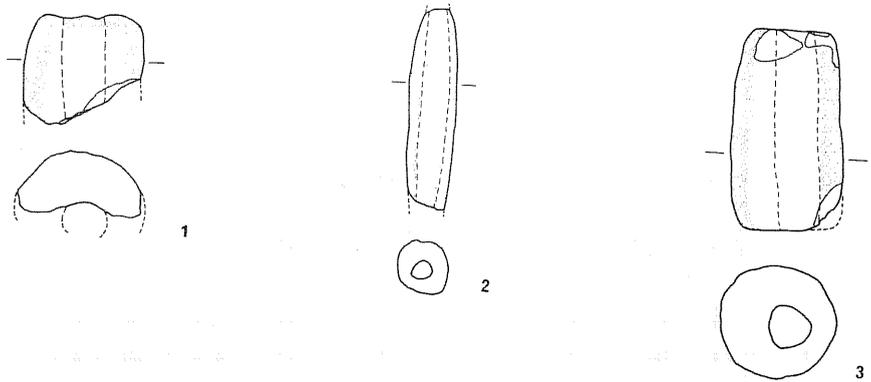
挿図番号	グリット名	寸法		遺物番号	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)		
12	C-16	6.6	0.4	24	欠損品、先端部
13	C-9	7.2	0.7	16	欠損品、"
14	A-1	5.2	0.6	21	欠損品、"
15	C-15	6.7	0.7	26	欠損品、"
16	A-14	6.4	0.4	29	"
17	C-11	7.5	0.6	36	"
18	C-14	7.6	0.6	22	" 先端部
19	A-14	7.5	0.6	30	"
20	C-11	7.9	0.8	35	"
21	C-11	4.0	0.6	34	"
22	C-11	4.7	0.5	33	"
23	C-24	6.0	0.4	18	"
24	C-15	6.2	0.7	25	"
25	C-16	7.8	0.5	23	"
26	C-17	19.2	0.7	20	"
27	B-2	11.3	0.6	14	"
28	A-5	11.2	0.8	12	"

**膳の脚** 2点出土しており、膳の脚と思われるものである。30は高さ7.5cm、幅0.7cm、31は高さ7.5cm、幅0.8cmとほぼ似た数値を示す。31は組み込み部に竹釘が2本残っており、膳に固定する時打たれたものであろう。

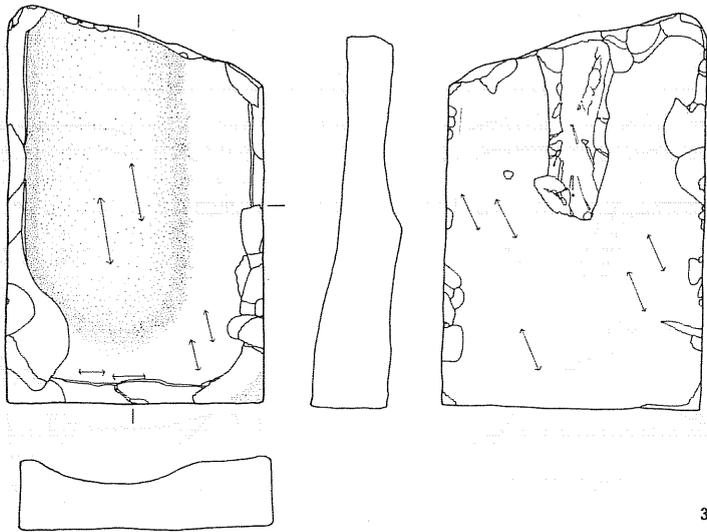
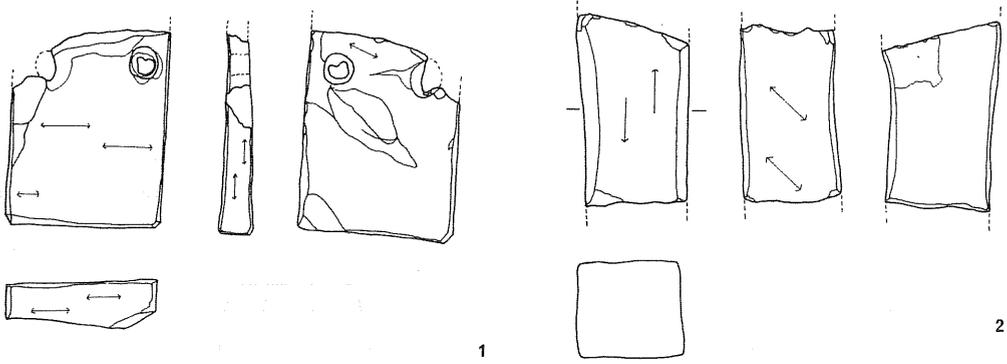
**戸車** 32が1点だけである。円形を呈し、径は4.4cm、孔径は1.0cmである。

**箸木** 本調査では36の1点だけであるが、範囲確認調査でも1点出土している。先端部は偏平でへら状になっている。

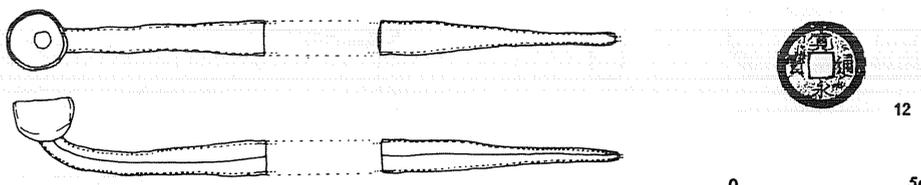
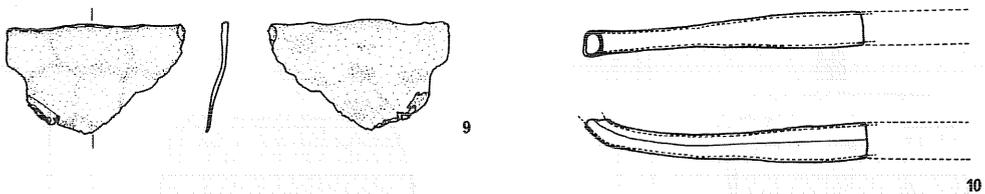
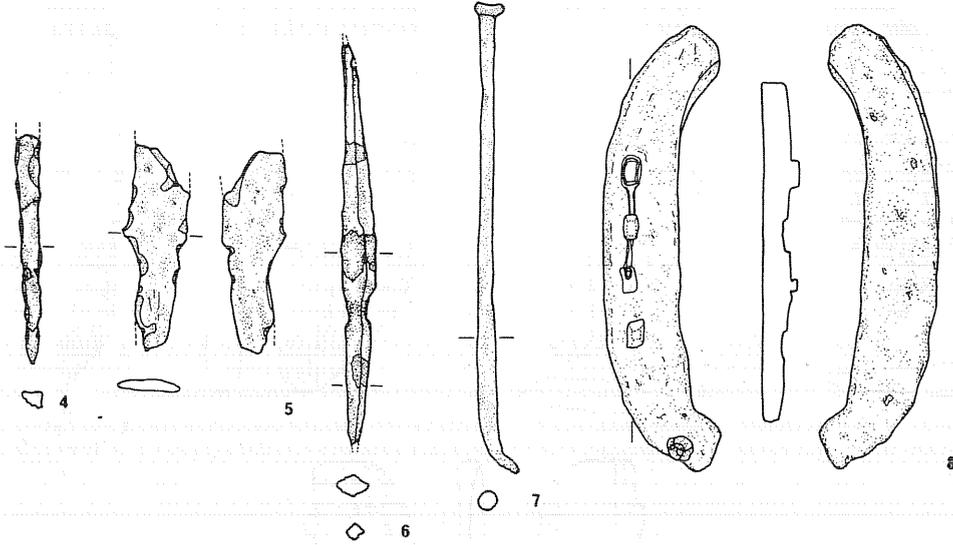
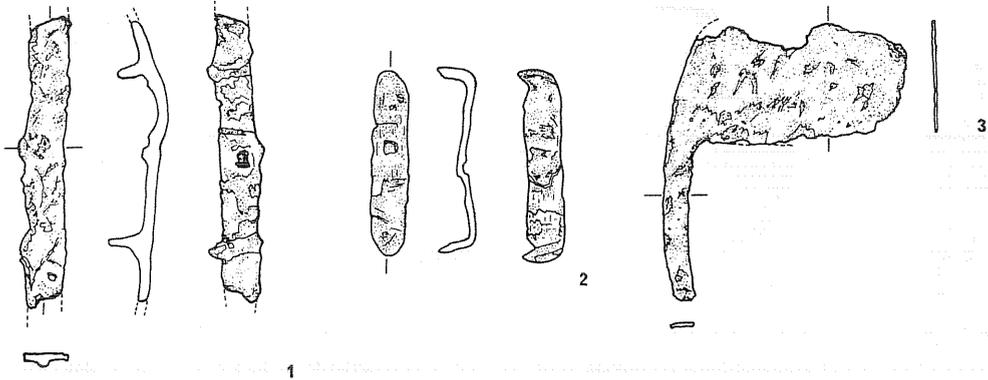
29、33、34、35は全体の形状、用途は不明の木製品である。



第18图 出土土製品



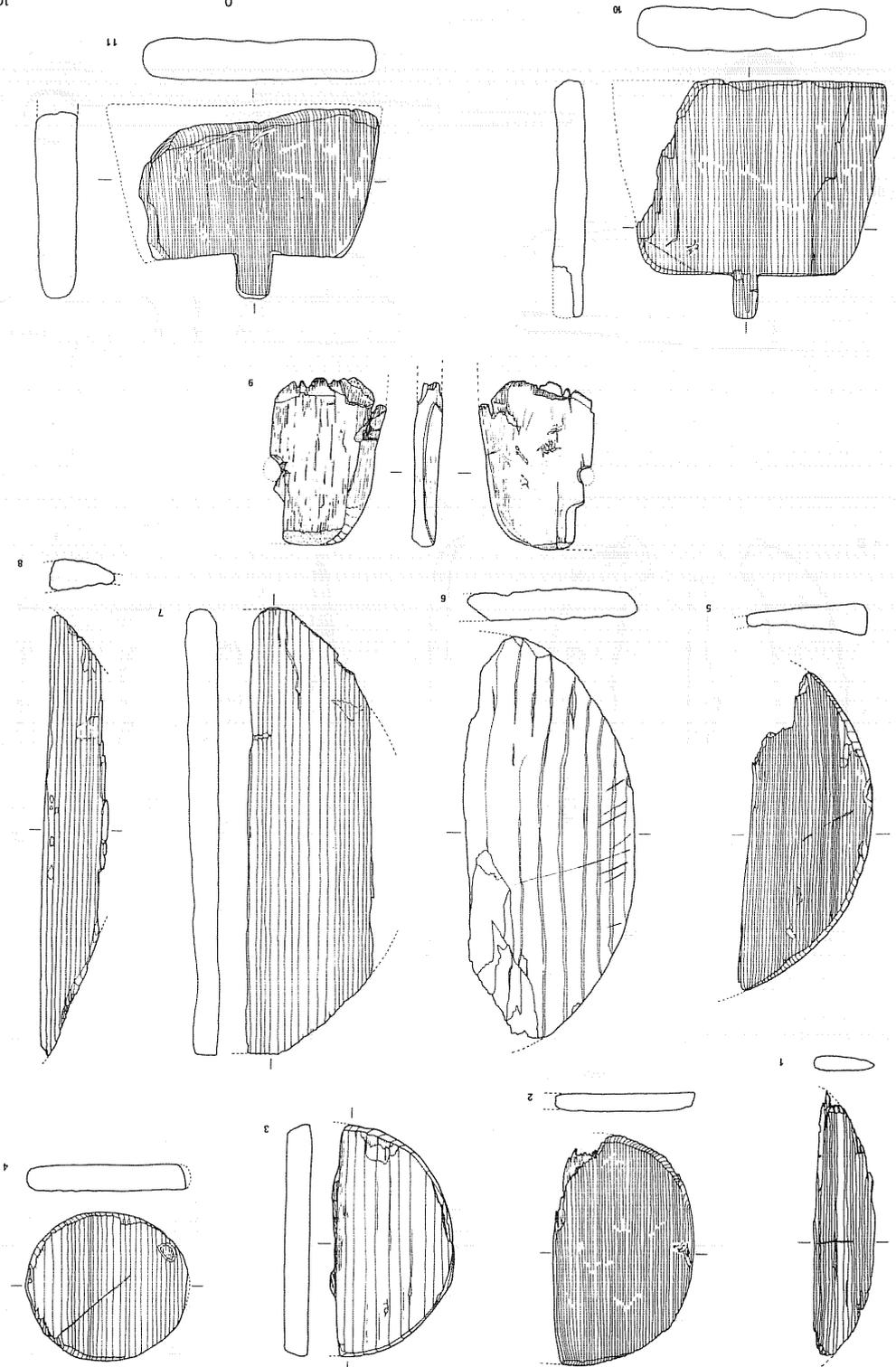
第19図 出土石製品

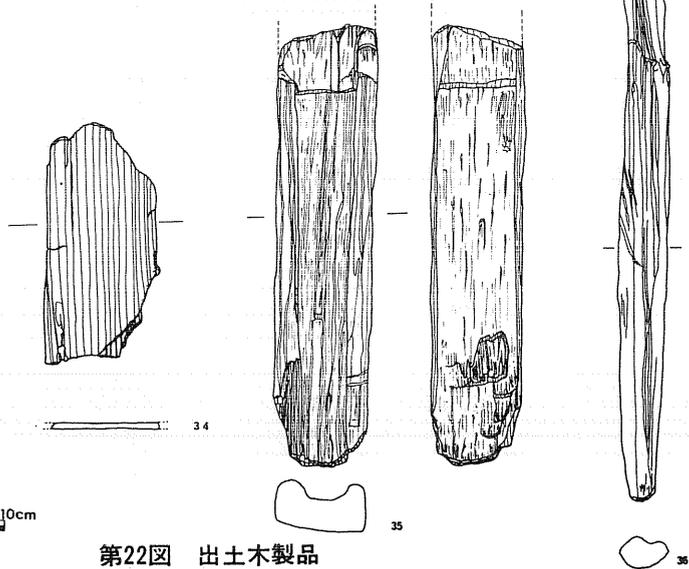
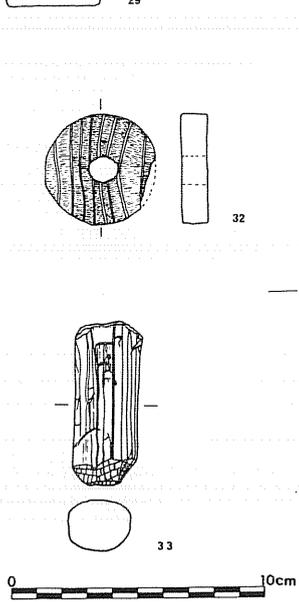
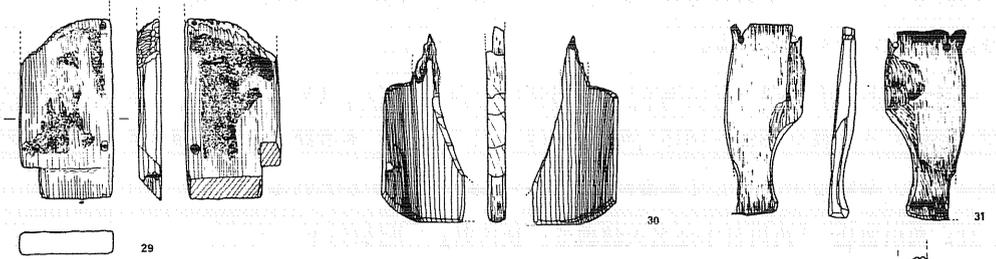
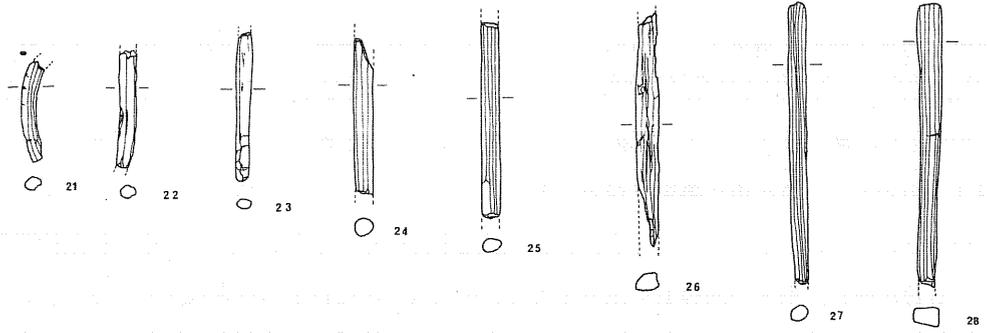
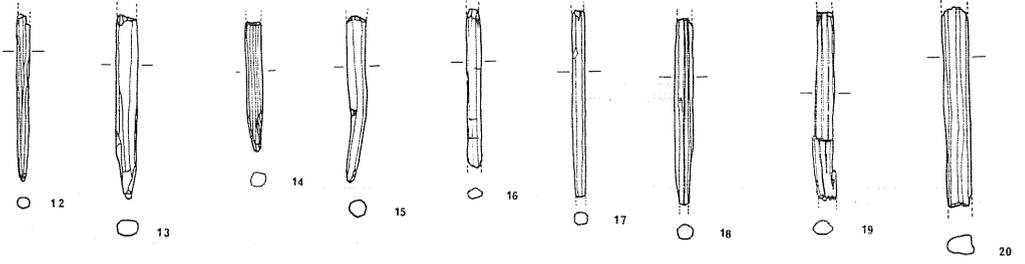


第20回 出土金属製品 11



第21図 出土木製品





第22図 出土木製品

## 第5章 まとめ

範囲確認調査と今回の調査で遺構は全く検出されず、遺物がまとまって出土した地点はない。遺物は平安時代の土師器、須恵器の他に陶磁器、土製品、陶製品、石製品、金属製品、木製品が出土した。

平安時代の土師器、須恵器は、細片が多く図示できたのは土師器杯、土師器甕、須恵器杯、須恵器甕の15点である。その中で須恵器杯が7点と多く、その特徴はロクロ水挽き成形で、底部は回転糸切り離し5点とへら切り離し2点があり、へら切り離しの中の1点だけ調整のナデを施すものがある。その中に墨書土器が1点ある。

陶磁器は細片で器形不明のものも多く、また産地未詳のものもあった。その中で初期伊万里染付、唐津系陶器、明末の陶磁器が主体を占め、年代は16世紀後半～17世紀初めと考えられる。

遺跡の周辺には南東約2kmに秋田郡衙跡と推定される石崎遺跡、八郎湖の西約9kmには海老沢窯跡などがある。本遺跡出土の墨書土器の存在や須恵器の焼成地の問題などからこれらの遺跡との関連性が考えられる。

遺跡の南東の隣接地には沼地と中島を利用して築城された押切城があり、存続年代は天正(1573～1592)～慶長(1596～1615)年間頃(註)とされる。本遺跡からは遺構は全く発見されなかったが、遺物などからして本遺跡との深い関連性がうかがわれる。

註 角川書店 『角川日本地名大辞典5 秋田県』 昭和55年



図版1 上 遺跡遠景（森山から北西を望む）  
下 遺跡遠景（北▶南）



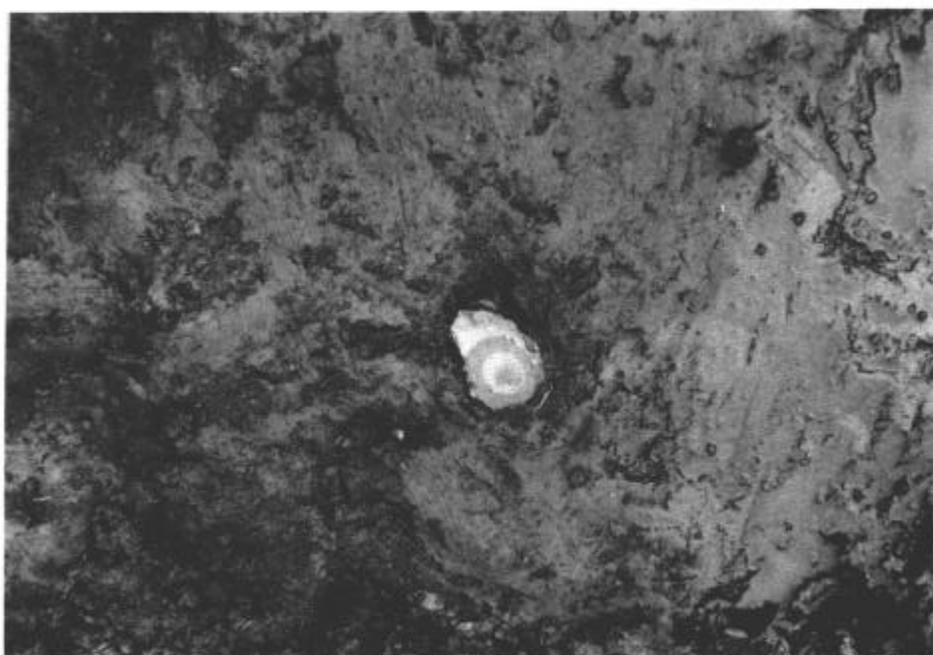
図版 2 上 B地区調査終了後 (南▶北)  
下 B地区調査前 (南▶北)



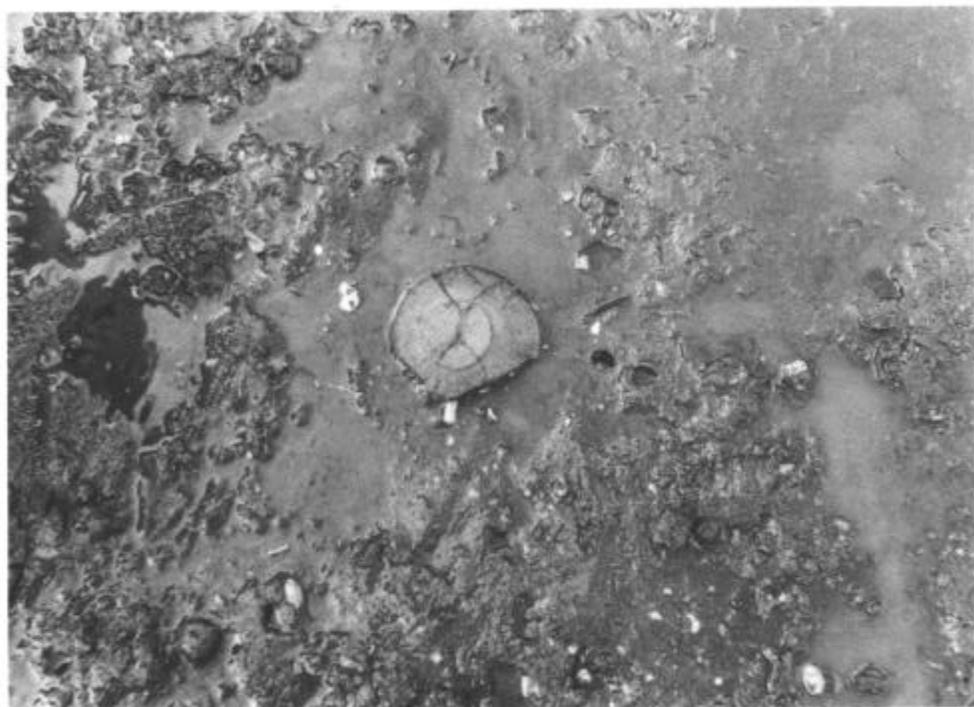
図版3 上 C地区調査終了後(西▶東)  
下 A地区調査終了後(西▶東)



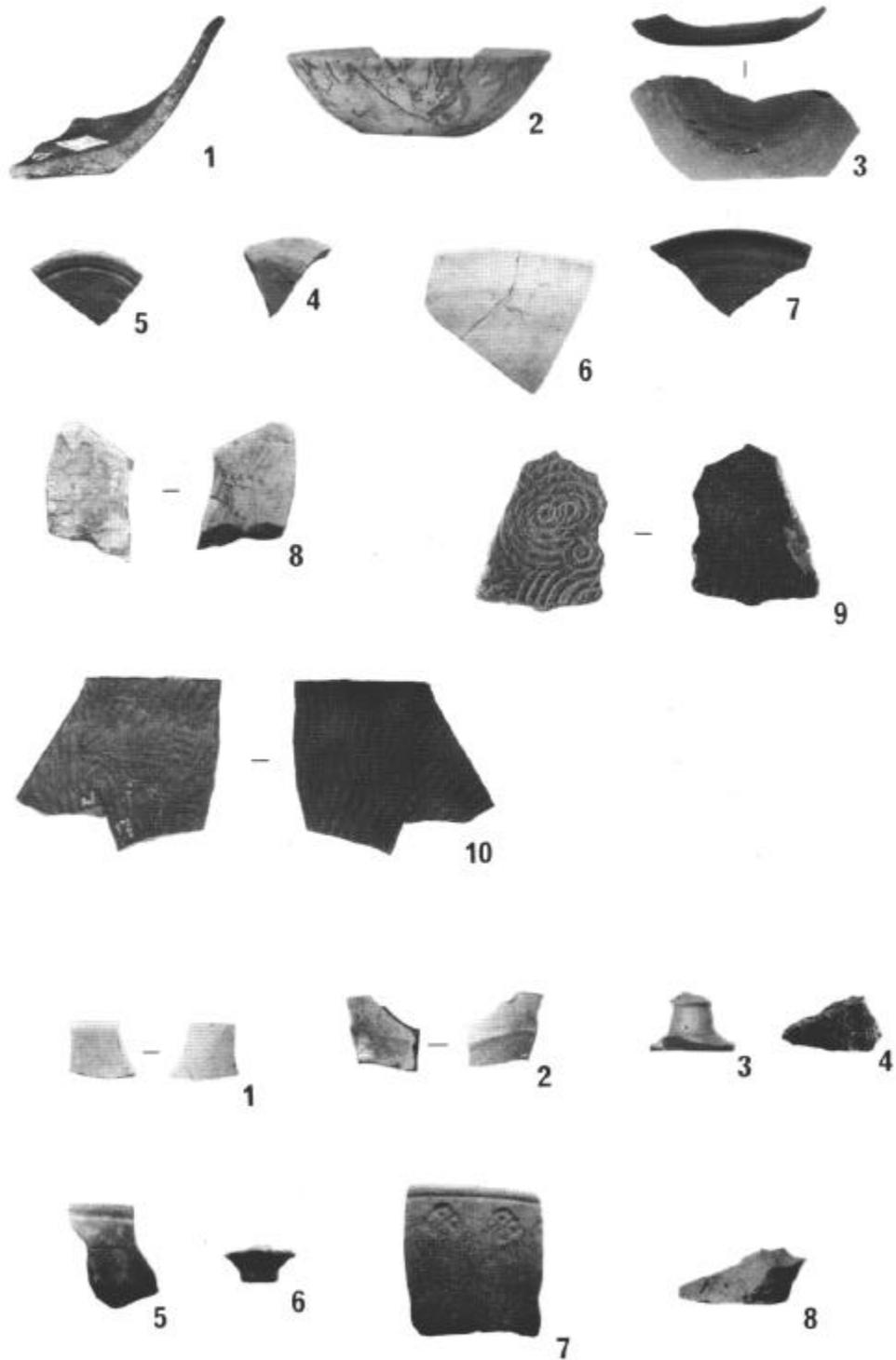
図版 4 上 土層断面  
下 陶磁器出土状況



图版 5 上 陶磁器出土状况  
下 陶磁器出土状况



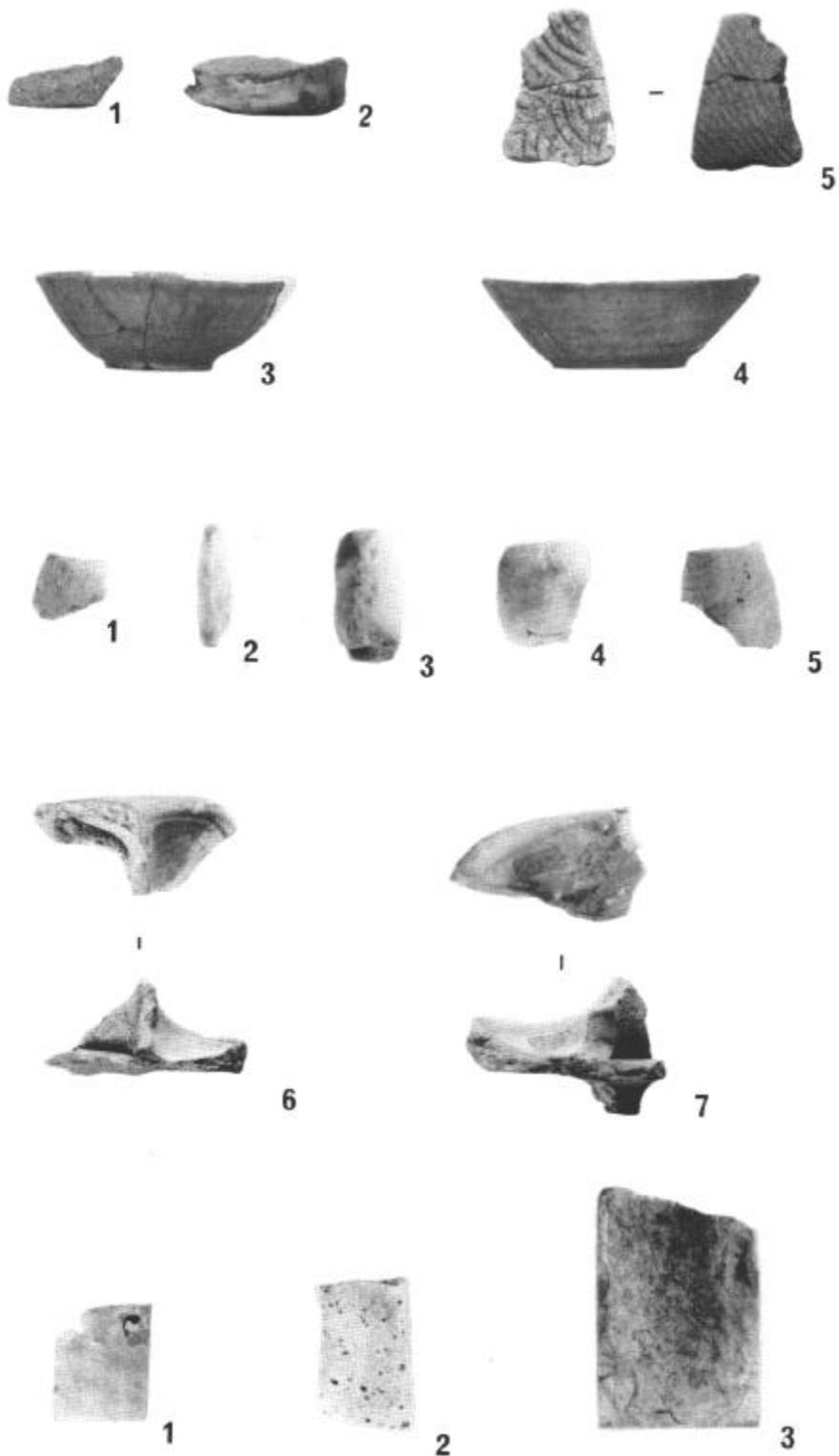
図版 6 上 土器出土状況  
下 木製品出土状況



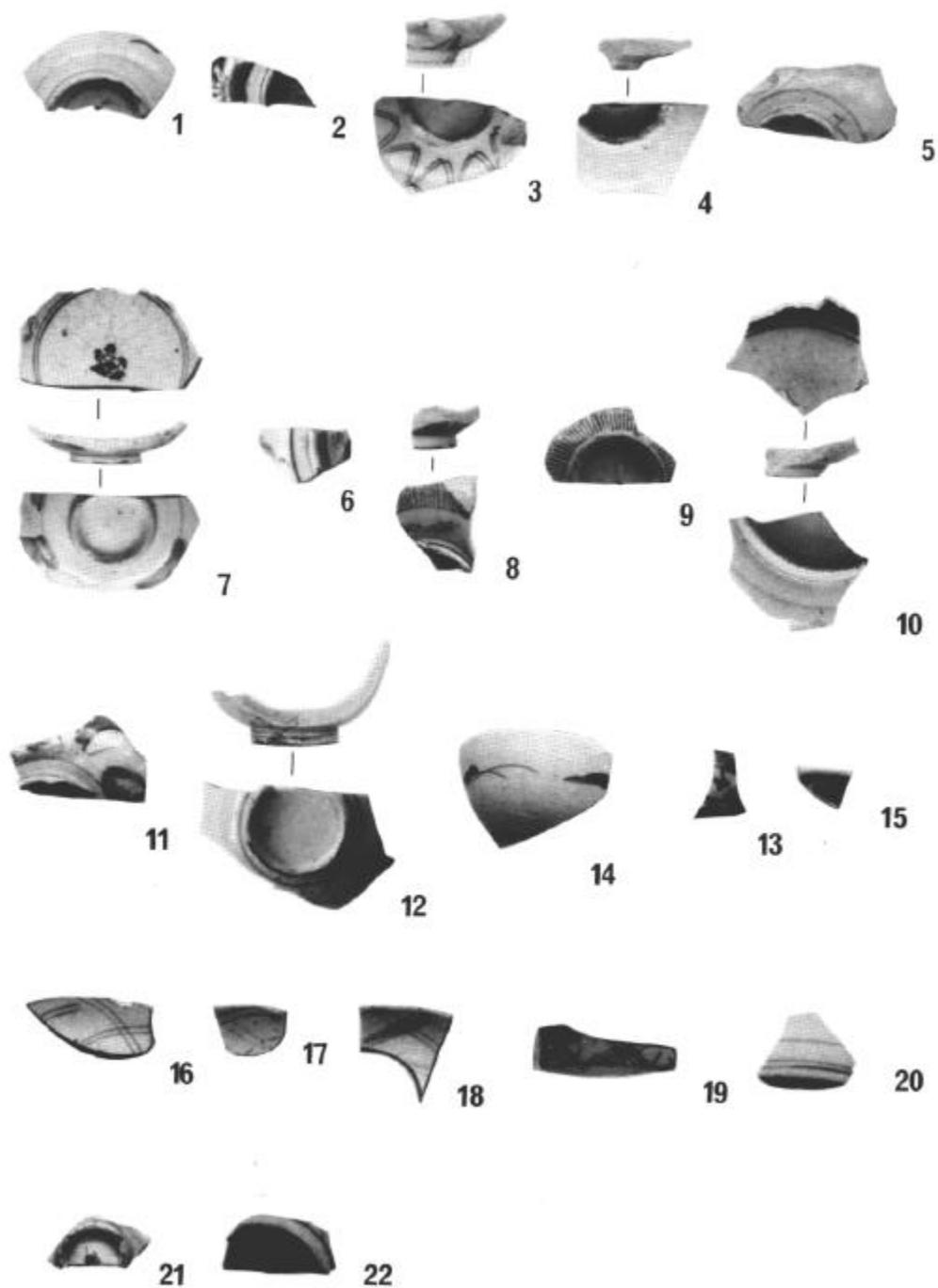
図版7 範囲確認調査出土土器・陶磁器



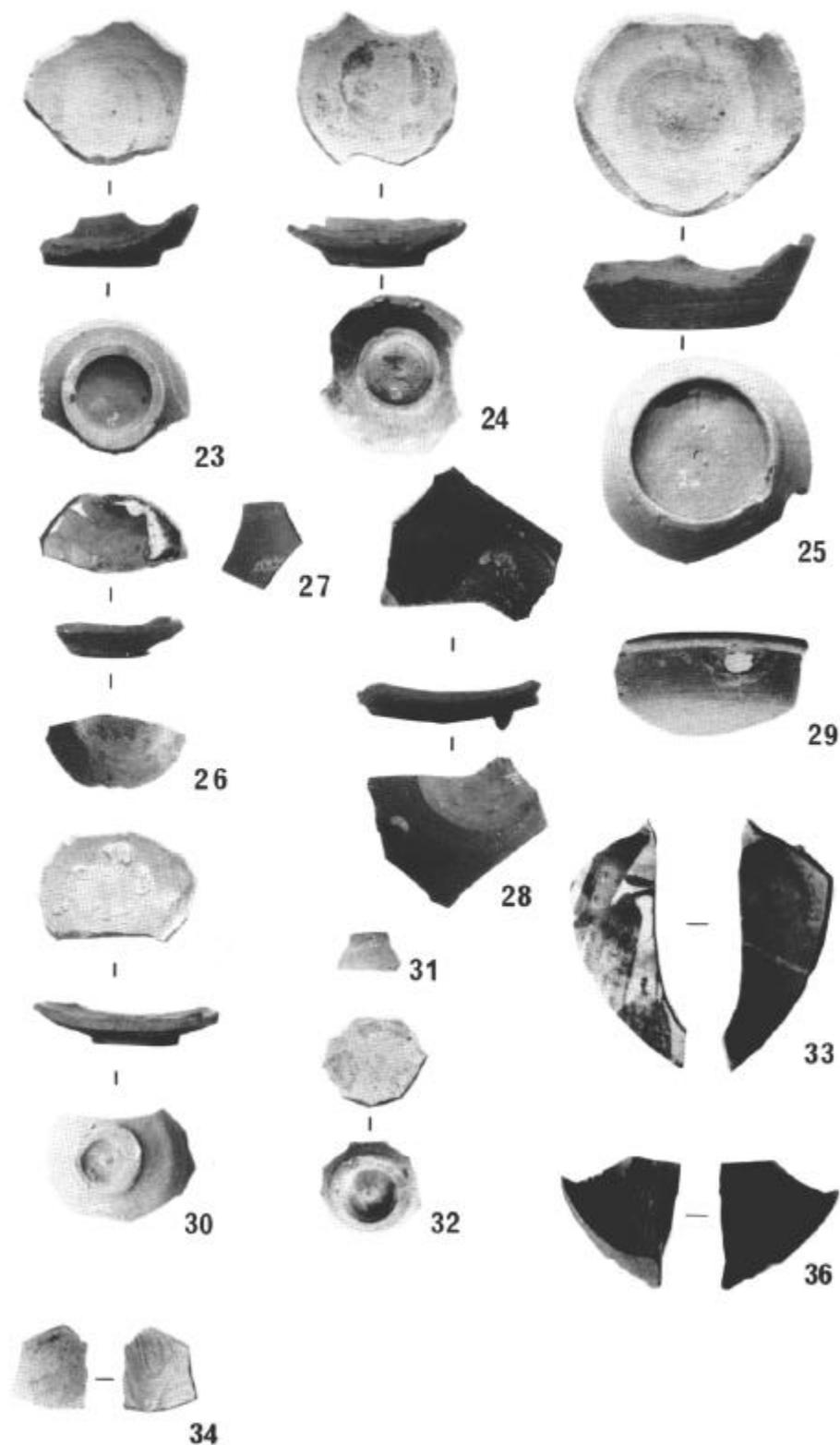
図版 8 範囲確認調査出土土製品・陶製品・木製品



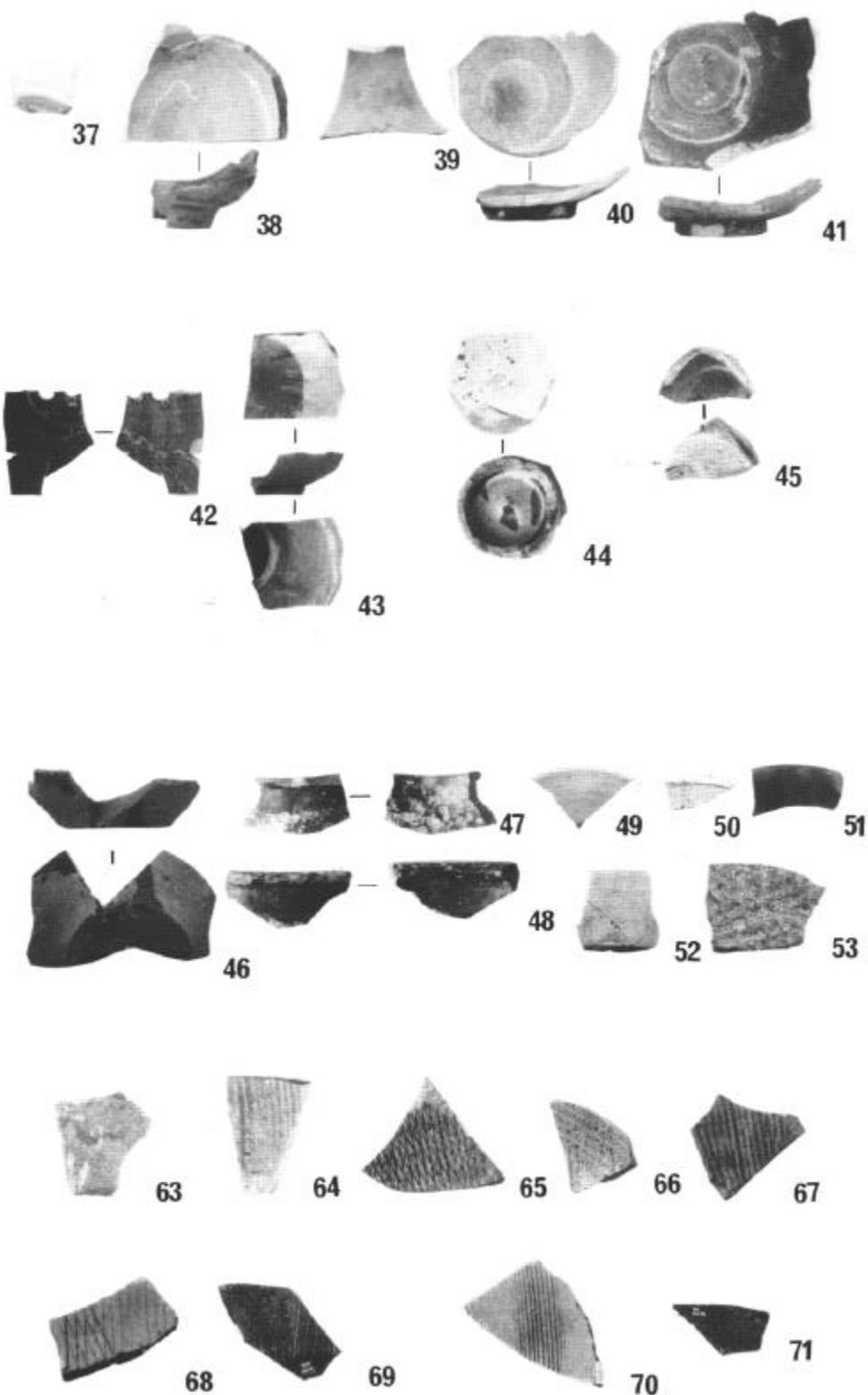
図版 9 出土土器・土製品・石製品



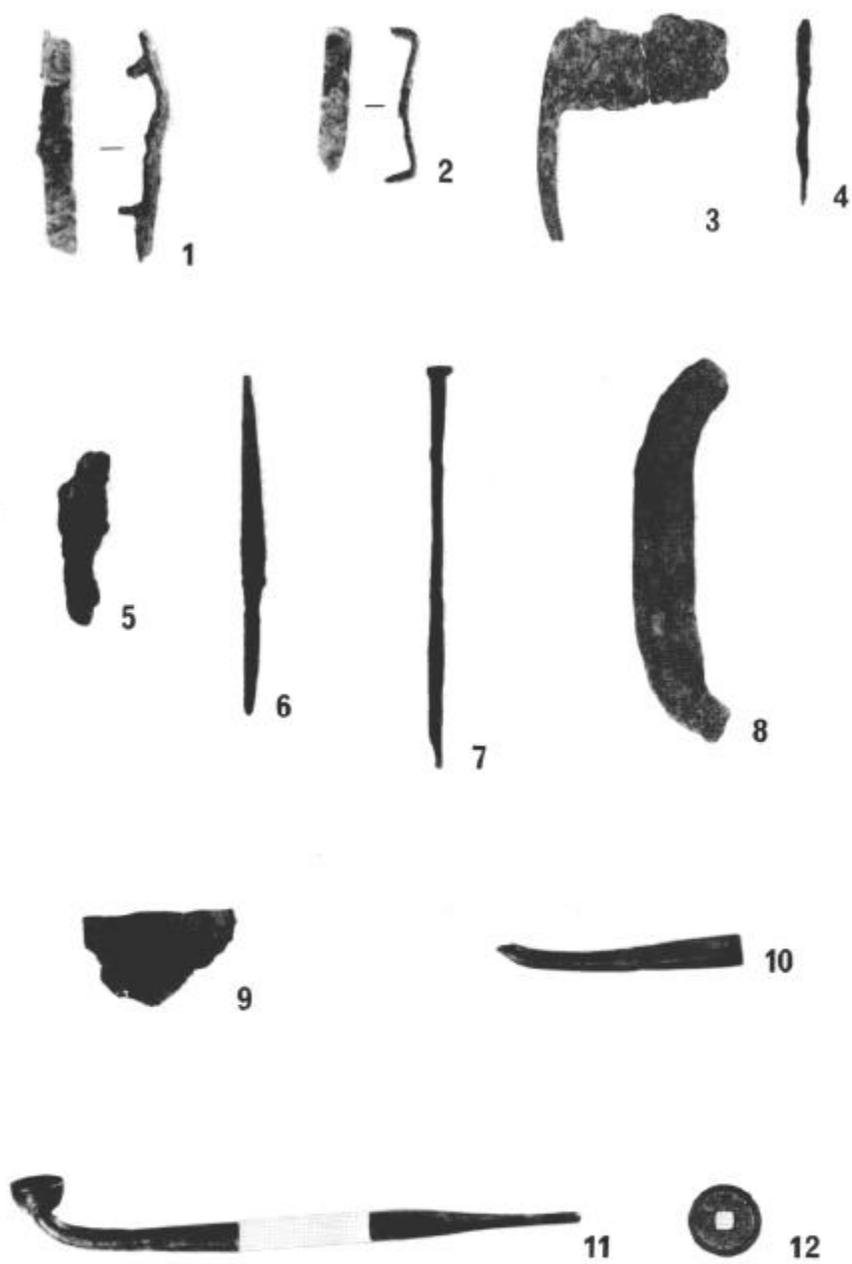
图版10 出土染付



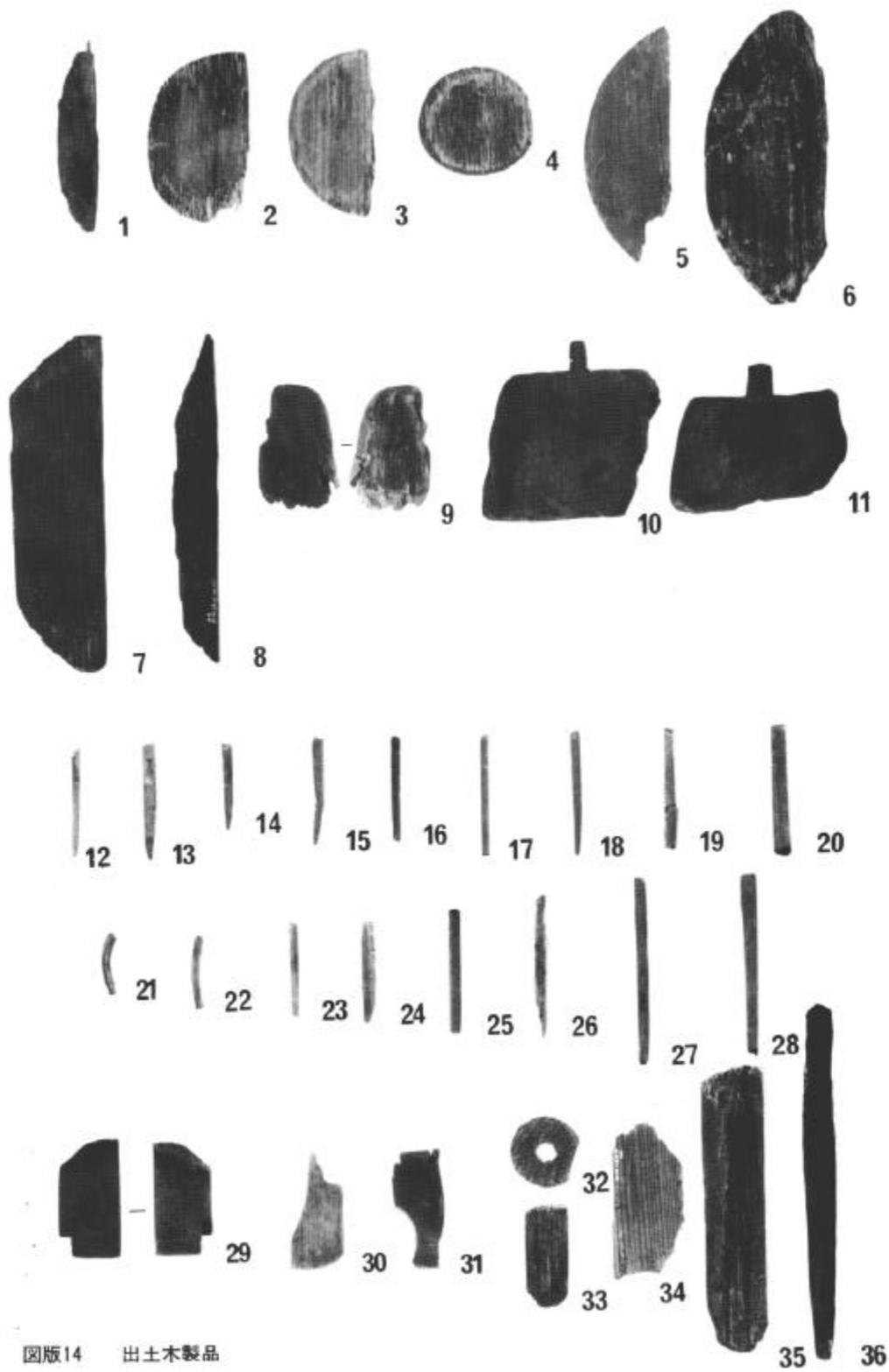
图版11 出土唐津系陶器



図版12 出土船載陶磁器・攪鉢・その他の陶磁器



图版13 出土金属製品



图版14 出土木製品